911.3
八
春貞

今既不如昔後
當不如今

奚東 玉峯爲則

青蘿庵可輔編著
一栗園寀松刪定

俳諧発句題叢

江戸本石町十軒店 萬笈堂 英平吉

誹句類聚序

我芭蕉翁之流風也素飄逸之徒
而老好弄道化諧乎常也翁之易
成者矣是以雖児女輩喝之日繁猶
蟻聚焉甘然于春于秋于月于花及揉題
練季句者每於翁之作俗望洋乎不
焉不難得矣獨時滌俗緣莫之二子
然甚如此有明題類題之二集行于
世旁徵句有益之魁者也今諸友又

青蘿編者雪門兜女輩可謂擲
筆者四書名曰發句類聚一日叩余
草扉而示之且乞所宜覧其句之金
玉藕之捐擔不啻児女輩学玉維老壹
老成人懷之則是左右取原焉欽乏
師輔同志青毅之斯擧可謂篤信
斯道者也主俳諧雖小伎思遠
趣廣矣况此集古人以為斡旋
今人以為枝葉森然具列如其側
定余豈敢乎只恐世之覩之者一

是青氈之勤勞而於其良散焉
因氷里庵中一塗哦之暇聊
裁蕪詞以冠其首云

文化四年丁卯秋七月上旬

深川隱士 八洲寥松題

玉峯秀明書

例言

一 類聚ハ津々古今の句をましへ出せしハ、さりとハまたハ多く古人と裁を追て二編を著せる人の句とわかち擧へし

一 此集よんこと用ゆるハ既二十有餘年也よりて撰みしまゝ草稿や、五七年句になか／＼今まて鐫せるにわたりて、詠黑庵の刪定とせられハ其章なくしまるものゝ纔に紀羅しのそきくさくせしハ且お識る人手わとえ其作吻のや情のれ等の記憶とまてあらさるハ求るいさゝかなれハ識く／＼決彼是ちくし容せる俳士ハその覧へし閑海の時わりし補ひかへすへきなり

一 遠き悲よりわくハ借一二句と拾ひの亦遮鐵せ好み

広く識る人あらく玷圭を磨きあらたむる人あらハ宜く一集の本なるへし

一 雪門にあそべる人々も先に聡言の周くあるハ粗此集にせの世に蔵せる先思ひ子諸名家の言葉に紅翠の深きと嬉へ々れなり

一 風調ハもとより撰者の様る所によつて褒貶いつれとの全くよしあしたかん家難あるへし 此集ハ大概発句假初なるものとさしおきさせて新く静なるを撰とりてなかにも志のれも世に絶てましまさゝるものに出しぬる其只集中に動きあるものなきとり見えあることならんかとそ

青顧盧了輔識

春之部標目

正月

元日 初丁　三の朝　若水 二丁　立春
初夢　初むかし　初春　宝の船　初空
花の春　松の内　大川日　花の恋　初鳥　若菜
福寿中　注連　花の春　歳旦混文　登つき 四丁
雑煮　七草　若菜　子の日　人日
春駒 五丁　大黒舞　繭玉　破魔弓　けさうふみ
春鶯　傀儡師　猿引　線香　福引
羽子　削かけ　小豆粥　ぬか杖　飾とる
古暦　藪入　芹 七丁　ちりむし　柳

鶯 九丁 梅 十一丁 雪解 十五丁 長閑 十五丁 霽日
霞 松乃花 十七丁 若菜 菫なも 菜摘
蕗のたう 余寒 佛忌 孟春温交
きさらぎ 十九丁

二月

二日灸 初午 廿丁 彼岸 列見
朧月 涅槃会 廿一丁 陽炎 糸遊 廿二丁 出代
落角 白魚 廿三丁 蜂の巣 鳥の巣 初音
帰厂 雲雀 廿四丁 燕 廿五丁 雀子 雉子
蝶 廿六丁 蚫 廿七丁 蛤 田にし 蛙
猫の恋 廿八丁 接穂 廿九丁 椿 木の芽 三十丁 土筆
薊 蒲公英 つゝじ 独活 焼野 卅一丁
麦踏 春耕 種蒔 苗代 卅一丁 [illegible]
山笑 春日 卅二丁 春夕 卅三丁 春秋 春風
春雪 卅四丁 春の海 卅五丁 春水 春雨 卅六丁 春月
春草 卅七丁 春霞 春山 凧巾 卅八丁

三月

雛 卅九丁 曲水 四十丁 雛合 草餅 もちい
三ノ条芹 ほうづき 宮会 汐干 四十一丁 小鮎
海苔 桜草 桃 桜 四十二丁 花 四十三丁
春の田 四十六丁 きゝ苗 四十九丁 若草 菜つゝじ 躑躅 五十丁
海棠 梨花 藤 山吹 五十一丁 永日
炉塞 五十二丁 行春 三月尽

夏之部標目

四月

立夏 初丁　更衣　白かさね 二丁　袷　青簾
若花 三丁　灌佛　一夏　幟 四丁　卯の花 五丁
郭公 五丁　麦秋 七丁　葉桜　實桜 八丁　牡丹
筍 八丁　菖蒲 八丁　卯月　杜若 九丁　夏柳 十丁
閑呼鳥　茄子 十二丁　緑樹　若楓 十二丁　蝙蝠 十三丁
新樹 十二丁　葵祭　葵草　[illegible] 十三丁　葭雀
紙帳　厨 十四丁　蚊　孑孒虫　鵜
蝸牛 十五丁　一夜鮓　木下闇 十六丁　夜野　田植
花橘 十七丁　芥子 十八丁　夜水立　蛍　羽蟻 十九丁

五月

菖蒲 十九丁 幟 ちまき 競馬 二十丁 [illegible]

百錬鏡 廿一丁 五月雨 五月晴 廿二丁 入梅 水鶏

老鶯 廿三丁 若竹 帷子 卯花 栗花

茨花 廿四丁 合歓花 翡翠 青嵐 早田

田艸取 廿五丁 扇 絵扇 廿五丁 萍 百合

蛍 廿六丁 夜月 夏山 廿七丁 夜涼 夏草 廿八丁

白丁花 竹植日 蚊虫 簾子 三夜混交

藻乃花 照射 廿九丁

六月

氷室 廿九丁 祇園会 夕顔 三十丁 青鬼灯 餘

昼顔 卅丁 日晒 一夜酒 凌霄 川骨

石菖 百日紅 蜀葵 霍乱 胡乱 卅一丁

心太 蔦も なつき 卅三丁 雲峰 竹婦人 卅四丁

簟 蝉 ほり井 卅五丁 夕立 土用干 卅六丁

嘉定 清水 卅七丁 鵜 卅八丁 蓮 紫陽花 卅九丁

川狩 撫子 汗拭 納涼 四十丁 御祓

發句類聚　春部

青巓盧了輔　編輯
八条周寥松　刪定

正月

元日

元日や晴て雀のものかたり　嵐雪
元日や佛法いまた渡来の前　蓼太
元日や蔵の錠ひらく當はる　天府
元日や京にしらぬ浪の海　普成
元朝や激掃よせて岸は松　完来
元日や町も日たけて玉椿　得魚
元日やこゝに隣ある事はなく　魯洲

初日

元日や人なきて小田のむすひ縄　一鷺

元日の人すぬりぬ文鍋　魚交

元日ところ中を世なきらぬ　午心

元日も母と酒くむ白拍子　イセ 銀徐

元日やくしきよう人形うり　ヨハリ 曉臺

元日や笑ふ声ある六ッの音　寥松

何ふ送るを知らぬ初日を法称元　吏登

まつりの大門日さし出　古兎　班象

くまなき井のおしき今初日かな　蓼太

海ぎはの小田切てくまつりかな　スシフ 掬斗

三ツの朝

三ツの朝三夕暮見えもさん　嵐雪

若水

若水や汲まるゝ時に人なるを　蓼太

色井やまつり人々皆は志る　浣花

立春

年既明て達磨の尻も眠かな　嵐雪

きるものこの花咲く絵に似たり　吐月

不の乙まき門の笛子まへ八来ぬ　故 班象

初夢

よき川のあやしき見えも目出度き　午心

初ことよきされし死ぬ見まかりける　蓼太

初暦

見てもつらき初とよそ　吐月

明けゆく暦初春の幾よろしき　吏登

初春

あつまるや男たちの山家しき　月守

初春や紹精光る町人流　寥松

けさの春

おぼえ来ぬ夜を寝しも今朝の春　スルガ 僊素

けさの春きのふも替て顔ありり　遠江 蓼主

井戸ひらく水も清よけさの春　蓼太

初空

まつ空やほころびそめて霜遠し　故 班象

初空や表は晴したる浅黄帽　スルガ 梧泉

若菜摘

若菜摘ばかりに出て日もなし　得魚

松飾

おのが門松を守る宿りぬ　吏登

家々に民の心の海老かざり　不騫

門しめや筆かくして松の夢　六窓

門松や葉雪の緑をおもはせて　秋杵

住の江や年々の雅し松飾　太喬

筆始

持ち初むるいつも松かざり　雷堂

年始や松の色ぞ見る筆始も　物我

初硯

一字づつ氷を出でて初硯　吐月

端書の二字書き出して初硯　故流

初鶯

豆畑は八畑かへりて初の手　班象

何とまあ静かさよ鶯　午心

若菜

若菜や根芹は八草の本も　中庵 葵太

福壽艸

福寿草蓬莱かざりけり　大江丸

作る八お千代もふうらく　木大

我家やいつもの様に福壽艸　午心

浮浪

浮浪に春の心をさゝめごと　濤江

おさまりや隠れと思ふしき遠き春　年心

四十まで隠れ住みし都の春　嵐雪

人おもしろきる宮おもし花の春　蓼阿

西行は何ゆゑおりて花の春　冠羅

何事か也おかしいまはもの帰る　三鴿

人もと花の春と耶よし育なり　普山

花の春

歳旦混交

牛守のまつ子も民の春　蓼太

去人の男桜かな江戸は春　吐月

淀川より放ちにし虫の春　完来

別の戸や屋敷の笑も内人数　元悉

喰つみ

ほつくりと喰つみ何も夫婦かな　羅雪

主縁に喰つみ寿や北日色　案松

雑煮

雑煮くふ春たち方の和子が箸　秀蓮

めでた縁や蕎麦にほまる古ちまち　嵐雪

七種

砕けぬは七草なせ浅き宴　吏登

七草や七種めくる大八日月　雪芥

つりは逸てたたき分く仏の座　蓼新

七草の外もつゝしみこの婦　周栗

七種は初先つまりも初菜の縒　珊象

初出の宿ちちあり七草菜　今人

行燈の基子あかりの薺かな　菜松

若菜

君と我摘みくらべけり七種のなかよくて　故阿象

若菜野やこゝろしの菜を揃ふ朝　六窓

急ぎ足の先になりける若菜かな　祇川

野を見れば女の月く若菜つみ　スルガ 茶鶴

きのふ見し野は摘人に若菜かな　梧泉

洛中は一夜に起てなつな哉　吐月

さも何とぬるみ流るゝや菜つむ川　捷岸

何ちらし野の道ある若菜かな　吐月

子日

子の日ありける野辺に染めてたしちの門　成美

源氏書て月をもまつや小松哉　イセ 護物

人日

人の日やけふ八尺を綴す松の風　班象

人の日はときはかきはの伏家かな　蕉雨

君の日や何かよそふ若菜かな　升古

人の日は人知らず菜を出せ出し日よりも　了輔

恵方参

知らぬ人の一時に来る恵方道　雪萬

大黒舞

大黒舞ますが婆ゞ連れまはりけり　吏登

綱引

綱引や鵞尾に揃ふ冒りしか　蓼太

破魔弓

あら海や大火焼家の遠き押　年心

破魔弓の金箔冴えて青き哉　寒松

けさう文

艶がきのむかしくやけさう文　蓼太

番卸

正月は遊び仕まゐや番をろし　雪珊

是からも夕日はひとつ番を綴し　吐月

傀儡師

世の中はおもひの外よ傀儡師　完来

うちあはせて淋しうなりぬ傀儡師　葎右衛

忍びぬ猫きらひしくはいらし　吐月

なき代の笑ひおくや傀儡師　六窓

恋の猫いゑした宿もくるはらじ　子交

狙公

猿引や巴峡を巡る浅葉の水　葉太

さるひきや見ておくしの唄子哉　時中

猿引やかせぐつあてもなの月　湖泉

深山木の櫻三味線や猿廻し　吐月

猿引やまてるゐ綱の長みじか　寸補

懸召

一定居持ぬ都なしあくる石　葉太

福引

情も捨ぬ史何ゝ何ゝ呂　午心

福引はうれしさあるても淋し　大江丸

宝引の蝶の囲ひけて都かな　吐月

婉く引や思ふ人ハ根なし草　史楓

乙女は福引上手らしけなる　午心

やり羽子や月の中より落るとき　蓼太

羽子板やまだき画くの絵風流　六窓

やり羽子は中を大八車かな　白麻

我門とけつかけかる出五右衛　蓼太

北隣の淡き紙や削りけ　午心

扇木やはあるかゝりや削掛　寥松

小豆粥

正月ハ淋しいをれらはつきあひ　班象

浅漬のさゝき白ひや小豆粥　故流

鹹きよれつねてのやあつきかゆ　寥松

三盃め饗交いろよ小豆かゆ　了脯

粥杖

ゝ田杖乃音ふてよいき力のあり　吐月

かゆはえせいつてあらぬ春の月　馬耳

鏡とる

松とりてさきらよ宝おはしけり　月守

左義長

されて人ひちあくりよ六日松　寥松

左義長やこゝしも似ふの名所まさ　仝

藪入

藪入やうしゝまれぬる花七日　婆心

やふいりや記のくみ迫まけり　吐月

藪入や花の噂見せ倖られ細　不騫

やふ入の宿やあらし浴ゑ二日　祖白

藪入の夢や小豆の煮るうち　洛 蕪村

やふいりや柳に押て日も長き　古由

藪入やせこゝし眼よつて金閣寺　十六 大江丸

芹

芹そくすゝ流れ田井の塔の陰　月堂

水ふ手れそゝきすゝめる根芹かな　吐月

般若経を芹よ書らふ門田かな　五九 郎蛾

芹焼よ歯の昔し記 女乃　敬六

銅の依の紫前よふくきる根芹かな　信中 松羽

乗りよくく流れみしらぬ田芹かな　不眠

水ぬるむ

柳

ぬるむともん飛る寒さにたちかへる水の月　蓼太
風のまゝに枝つく流るゝ柳かな　嵐雪
むら節も終まらたれぬ柳かな　東登
むつとして戻きた庭よ柳かな　蓼太
青柳やむかしの橋は川　三鴿
明ぬのゝ月にうちかけて柳かな　文毋
青柳やのびてもとれにさそふ風　魚没
うつろしき神やしこりをやまき　ま水
中ぬ埋てゝかき柳かな　普成
青柳や八ツの見さし銭針の衣哉　完来
遠く木の梢ぬけて柳かな　石髪

山畑にさして流るゝ川柳かな　吐論
柳見て出ぬも来ぬ人この都かな　蓼太
一日の春をみとりつ柳かな　宇平
ふゝむ葉乃かよはなからも柳かな　青橋
枝よりて柳の末にかゝる風　曙鳥
志られては幹のつまゝ柳かな　吐月
つと入て内から見ても柳かな　六窓
何となく一日なかし柳かな　乙児
青柳や傷まぬうちと寄りゆき　月皐
曦の取りにかげふ柳かな　鳩丈
手を追て女をあつかふ柳かな　鶯古道

さく〳〵と日和のそたつ柳かな　南羅

石橋をわたる橋にちる柳かな　故 班象

ふる家のもとをまつぬ柳の糸　涼花

隠れて帰する舟の柳かな　上毛 素輪

さし柳やさしく花のつまひり　蓼太

むら〳〵と出て獨りえらふ柳かな　嵐亭

柳見て作る木やある心　武府中 維谷

今掃てかい路のある柳かな　巴人

山寺にして立柳かな　月泉

柳から舟のちる川かな　牛毛

おく〳〵はなれてよき柳かな　洛 蒼虬

さし柳や二節三節老木より　柳居

糸つきる柳の光りも目さしかな　左皐

さし柳に吹き来れつなく女貞　サルテ　不朴

柳の芽毛はあたれ吹くしく　氷花

立て見れは緑涼き柳かな　完来

さし柳や何けしきぬ夕九重　寥松

人中にのみは立れぬ柳かな　大江丸

都出て見れぬ柳に夕日かな　雪萬

梅柳も臨のときに一の雨　洛 蘭更

きのふの柳見る今の月　笑和

さし柳風もちならえ色に来ぬ　永蔦

鶯

鶯や書院の西戸あけし音　嵐雪
うくひすや人も人をまち明し　東里
鶯や九つ前の川きけは　蕪太
うくひすや山路をわけき柑子　旦青
鶯もたえたる作のさかさか　松風
鶯や障子に竹のとまるまで　虚舟
うくひすや経き日あたるかなし　吐月
鶯や桜さくらの縁の草　月皐
鶯や西の梢のかの紫垣　六窓
鶯の鶯ほとる河きくは　雪珊
うくひすやよく見る河の夕かな　寒松

うくひすや宮の河日ハたのし　班象
鶯や朱を河見るるかな　普成
うくひすの宿の日ハ流る門　治 春坡
鶯わかるも流るうするき門　春蛾
うくひすやうつても花の咲く　二鳴
鶯の世く夜るに御名郭　雪衣
鶯やわくたれをむかし　吐月
うくひすや手の無義にかかし　月守
鶯を待つ日れ家鶯　年心
うくひすや竹一声も寶あり　一鳳
鶯の声ふめまで谷の中　スルガ 浦秋

鶯にゐらゝ息する山添の家　嵐雪

鶯の谺は下れたる那　蓼太

うくひすを探て出里はゐなかゝ　老鳥

鶯や京へは北枕もたらし　秋杵

鶯の聞て来て鳴家の庵　月草

うくひすや小松林去年の家　完来

鶯の呼吸も見事る日和かな　翠兄

隣よりも鶯遠き嘯の家　普成

鶯の飛ゆるかたむく夕日かな　信中 柳荘

鶯や昨く起てゐる行儀　大守

鶯に終日遠し畑の人　蕪村

梅

鶯の梢子なりの為の枝　信中 猿左

鶯や枝も流るゝ竹筏　黒露

うくひすや割枝に飛ぶく嘯　東川

鶯やうきに罪なき藪の声　洛 嘯山

鶯の声近つきし山添の家　魯隠

うくひすや老を探しもきたる家　武丸

鶯の谷間の日数桜まで　萬山

梅一りん一輪ほどのあたゝかさ　嵐雪

梅咲て何ゝ春はあからさま　吏登

搗を茶木やく隣も梅見んと　蓼太

見ゆるは見きれへいやし梅のある家　沙羅

梅と香のころもれくに翁りけり　白麻
梅をみてこゝろもとなしと見て返り那　完来
梅木屋の嗅せ通ふ梅の花　吐月
梅あけて娘の見る梅の月夜かな　宗平
明暮の伐るゝ深山やむめの色　蘂太
おく庭もなき梅の白ひかな　玉宗
ひよ鳥に何からかゝる梅乃花　不寒
梅の花何としても乃ほとゝぎす　既明
昔ふたゝび来や袖ゆゝん梅の色　泰滄
梅ちるや心をこかれあき　欽丈
梅ゝゝや香を傷てし御簾の外　三東尼

みなやわか松の中にいさゝか梅　普成
梅一りん風も老木なゝめの見ゆ　雷堂
梅の香もなゝめに居眠る伏於かな　下サ 吐雲
人ことに諸足る袂より見る梅かな　蛟牛
梅さくや夏めき雪さ袂の傘　朴古
谷の梅香を借りに砕りかな　釈 路風
下さ向乃人には暮ぬ野梅かな　洛 寥松
春や梅やわか松の暮居に角力取　蕪村
打きたちる二月の梅に等かな　年心
ちやめさしわ瀬踏まちかく畑のうち　雪路
巨燵から梅見て居るも京者哉　大江丸

菡しきる畠ありむらさきの色　班象

梅咲て花屋は梅ハありけり　宜參

香に窓るいつこと月そ古梅哉　蘭尼

はちくと梅さく畑や高上里　蓮佐

梅咲て独老なつしと持ちれバ　キヤト 燕山

筆わり影くつて梅の花日和　菅雅

雀喃て花藪の書梅咲けり索　節句

かくれなき隠人し行月の梅　大江丸

梅ちりて藁家過ぎ行折戸　荘舟

梅か香やさえわ尚る折の衣　橘奴

むめの色うつさハ壹て掃りけり　二華

寒しさや鉢鉢さ飛しむめの花　田中 山我

かくし梅は野して高明月　巴明

小松原て香ハ路し梅の色　菰笠

立ち別し老女行けり梅乃宿　雪珊

むめかやさわと風にもまるる花　阿州 青橋

折窓の月あつく名くり独縁の梅　完来

梅不立嬌りよき枝の高さかな　午心

正月の思ひはしめや梅乃もと　吏仙

伽羅くと咲りけり梅の何るしら那　蓼太

梅か香や居ならひ浮つる魚の骨　寥松

我庭前の梅咲桜ふ思ふ香の菊　了輔

両ふく風志梅紀きむめの出　タナハラ　梅谷

花さへ香を撰る梅の林かな　白麻

梅が月をあれしるさむさ哉　サハラ　南汁

白梅やおこ聲す香もいろはなり　タナハラ　魚史

宵の香をさ行くあらぬの梅　淵象

梅ちるや隠き家拂ふ西の京　洛　几董

名梅や咲さりされしたより　十六　石嗽

世に経るも折る時白けり梅の花　六窓

香にあふむむ枝もほらん梅一木　葉太

武士や里や梅経ちしほ外羅波　朱美

下さに露も凍れ行出めの花　魚泣

いさゝしき峰の寺あめ梅の色　蕉付

日毎にさる物の学や梅の花　ミリハラ　巴兆

梅によく田も見えてより　買麦

病後梅やちら捨てをる梅の中　故牛

紙裂て折ある梅の垣根かな　字石

梅さくや人白ふるき山在所　嫁秋

むめの花まつる寺の名の畠かな　菜谷

梅さくや咲まや鳥も宮しほ　味月

とかく大にてよありと梅の白ら部　風之

梅一輪もえ続しき書と紙ひなり　帰楽

活おしいむめ笑ふて梅尺かな　露居

春の夜よて畑板ある梅の色　六窓
旅仕度る麻路とのちらみ花　似庵
おもくとも梅まで見し　月ち
梅くる蔦飾戸の小家かな　雲洲
梅ちよ枝くみて後る井川かな　秋兎
此所の梅経舟とに折る我かな　子芽
梅折まち寺子の咲る垣根かな　文枝
何となく梅ちる中の朱すり　一壌
志なめに小家寄りに山梅かな　升古
白梅や手折まち席の雨の色　宣来
白梅や家に出来庭つなり　李童

雪消

白梅に地下の切九りかけてまで　宮座
紅梅や唐門過て石なる　数 潤象
白ね水に辞して雪解かな　吐月
遠近の松はなて雪解かな　信中 也笠
森の巣のやうやみに雪解かな　巣兆
雪とけて尽くて座る小路の鶯　道喜
雪解して猶白に折りて都かな　朱美
色きくと長閑よあちらぬ春畑　吏魚

長閑

長閑さや夕日にかくし碇綱　天府
のどかさや色々新羽る春の鷺　米史
雲もまきのとけき空もかな　了年

霽日
暁月
霞

長閑さや海みもよらに鳴燕　三笑
のとかさよ芦かハ今年秋の月　秋良
去の霞あハ去てしくも長閑之　風柴
去日を芦子似よ人の古　露松
新日や見渡さびしき墓所　菅雅
門立て後よ芦たる暁月かな　玉桂
松を出て花に花色かなきかな　嵐雪
海原の影渡るてり去りけみ　蘂太
千細に海村の霞む夕月かな　天府
二三丈日のくれまて霞の子　月泉
名草ハ左ちまた霞けり　人左

松も見えて霞の中山かけ　以絲　庵未
朋何もと不の見えりけり夕霞　不鷺
うらしく霞みてかる我の伝子な　兵曽
山畑や霞の下の笠水人　荊文
三よ錦く帆よちまちる立霞　錦衣
夕霞都の山ハこなた丸し　海　蝶蓼
うれき女のあちるさうる霞かな　円竹
芝上社悟り何ふ霞一筋　似游
さんさあくはら太のや新霞　蘂太
霞よりみとある新社歎く彩　スルカ　松宇
不えくも霞二ツ分る峯の月　雄詩

山門ゟ出れ婆ゝ霧ぞ寺哉　不騫
浦人の中にまたゝく霧かな　蓼太
出来て霧の進る夕への雁　スルガ 一雅
草霧や水に霧ふる夕かな　蕪村
鹿も其まゝ消ゆ小野の里　乙児
舟もよりみえつゝ消る野霧　樗良
摘も残ぬ野の心をく霧の中　嵐堂
山くの白く崩れて霧くの末　五宇
沖の帆の今ぞ現れぬ霧の末　點花
ありたけの小舟出る浦の霧　肥後 玉宇
夕ぐれややゝし霧む町の境　吐月
かすませて子安見えん芝人の森　蓼太
藤霧あきみふの雲と地の郷　月袁
あしあと茂つくもみゆる夕霧　臨丞
おもきしは山の岩て隔る霧かな　阿音
かや原や大きな木不し遠霞　寥松
遠霞川より低き畑の郷　其由
佃の江と中までとゞく霞　松飲

松花

宮守は寿ぎよばれ松の花　蓼太
七いろの落ちる山や玉川の花　其水
かましふる花や冷しん松の花　スルガ 雪母

若艸

志中ニ朱の御橋やよ川のちる　不騫

若草とや人さわぐ日増しらん　雪萬

こゝら若草や山風かよふ垣の内　巣兆

茎立

薊何事てくるゝ宮人野あるき　嵐雪

くさやかや山葉何とすり乃袁あ　百里

菜花

菜の花にのしけき大和河内かな　蓼太

菜の花や霰を見つる山畠　天府

菜の花の花くれ見ふて吉野かな　即娥

菜の花に午時一般の蝶身かな　文足

菜の花や野は名は家かんず　吐月

菜の花や暈やされる見わしき　班象

菜の花や中を流るゝ大和川　月巣

菜は花もやらく表家れ小家かな　錦太

黄ろ流る大や菜種の花の形く　蓼太

菜の花や大根畠八木幡かる　楳蓋

蕗薹

嬉き乃薹ひらけて人の縁かな　嵐雪

蕗のたう萩のもとをほり出しけり　完来

育てとハ思ふ若草のたう　白窓

蕗の薹使ふ雪かきわけけり　翠兄

余寒

冴ゆる余寒の鳥かよふ　蘭太

旅籠屋の朝飯思ふ余寒かな　完来

志ら雲し　様子をしらぬ朝の寒　蓼雅

孟春混交

鶯のきこえはゐるる余寒かな　三一

こゑ咲るあたゝかき余寒かな　久能　詩

淋しさと田よりもつかぬ余寒かな　技老

ひよ鳥や菜に薫果て侍るの外　草石

淵川の春して春めきさがる　雨滴

人間にまだ降りしきる春も柳　完来

正月や晴しく申る木綿もの　寥松

後庭の梅よ柳よ江戸坂　其徳

咲ゑた風ハちるや春くし　乙児

春めくや山も流るゝよい在所　蓮佐

有ふれし春ハあたらぬ畑よく人　寥松

春めき果てさらに淋しやさくさくね　天ろ

正月や子にさそはれて養まゐり　亀乙

何ともなくまだあはれ廿日月　蓑砕

正月も三日ほどたてハ人たのし　洛　闌更

春なれし鳥啼るゝ姫の内　郷義

正月の影より寄り小商人　樗良

知らぬ世も我ハ春ぎや女猫　嗟風

人ゆけや田中林慕しも谷一面　道彦

三ケ日も過ぬ折ふしよきろく汁　寥松

鉦しの人も春めきや帆かけ船　都重

雁ゆくぬ雲ハ何の春の人　風状

古株よいさ翁草や老は田の　蒲丈
老もろもつけて一日くらしけり　了脯

御忌

ゆくゝふ見て飛ふり御忌小袖　草阜

二月

衣更着

きたゝきや巨燵の孫を抱ゐて　嵐雪
衣更着とゝつく浜辺の気色かな　青羅
きさらきや歯にこたふ里は海苔諸　旗渕

二日灸

涙見るも恵あり二日灸　年心
二日灸飯の夜にてかくしけり　子蘭
きく作る命養し二日灸　在魯
二日灸逃て出しを渡りけり　月丸
子を思ふ心のあまりや二日灸　古株

初午

狐新や初午月を頼みけり　完来
はつ午や梅の花なる人こゝろ　故 班象
初午日桝は底をつく半楽　不寒る
はつ午は老八難からとりけり　文母
初午や見さく思る八十年　文足
はつむまや湯燈の数も江戸神子　吐月

彼岸

東門の額よりくるゝ彼岸かな　普成
その世るふ笑ふにおちる彼岸かな　大津 冬程
彼岸とて尺をもちはこ入日かな　鳥酔
八景もさくらぬまで来は彼岸かな　スニラ 梧泉

列見

朧月

列見やきぬさくらのさそふ朧月　師心

中川やほりすゑても朧月　嵐雪

板橋の音あらはに朧月　吏登

東からあけてもてらぬ朧月　蘂六

かゝすてゝも墨染のおぼろ月　木奴

有明の海月に落て朧月　六窓

花守も縄にまかせて朧月　蘂助

おぼろ月松の木末は降如し　鱗上

明止て十日の宵や朧月　閑竹

品川里灯ともし朧月　吐月

行くれてあかしも見えぬ朧月　禾々水

上廿

むら雨と通りて月の朧かな　連枝

入相の声のおほろおぼろ月　同巣

春さめと花も桜の朧月　石意

暮六川原で笛は朧かし朧月　千町

世の中もうき世おぼろや朧月　秋帆

白魚は沖の夜鳴やおぼろ月　互全

しつかさに松を眺めてや朧月　南羅

大名の橋は春のおぼろ月　蓼太

佐の江や松葉もおぼろ朧　百羅

涅槃會

猫んなくやきれてほつれ涅槃　蒋蓼太

ちるすぞおぼろに而て猫さんし　女　里恩

陽炎

何人そねはんかけつる遠き山　宇平

ねはん見や佛とハいはし女より　月巣

涅槃会や月の兎もかけ合ひ　吐月

ねはん像男乃従も哀あり　完来

此年よハ不足ハ何にねはん像　守厚

陽炎の掃よせてある屑かな　藁太

かけろふや汐の川たる綫の上　露滄

陽炎や東り海より菜弁当　六阿

陽炎の中や田井堺る人心　海東

あちこち行や根ら集めて水の月　不寒

陽炎や君よりやはき洗髪　馬耳

糸遊

出代

陽炎を踏てけりけりや小田の鷺　月巣

陽炎や眼先に富士ゆらくらし　吐月

かけろふや十二峯の首に砂けふり　蒿笠

糸ゆふ極やはるかしる稚宮　氷花

出かはりや移んけ宮の何かれ　嵐雪

出代やゆふハ謝も行かれし　宜麦

牛の気に入て出代る男かな　呉逸

出代や墨ハ道ちかれ讃の辞　吐月

出代や出も河内の従男　司丸

出代の行燈つけて別かな　泉鷺

出かハりや思ひきれよの帆かけ船　仙露

鹿角

御代の春にもよする乳縄 小戸　買妻
御かりやあやめの後はかなしつきさ　年人
御代やともにふもに袖遊　公苑
御かりもせりふおかし一手桶　魚汶
御かりの男に見らぬ同とふ　廿 魚あさ
御かりや見ぬあいとも鶴飛　蕪村
御伴や鳥なきれ飛れはなり　廿里ん
御代やうしと山くもの浪　照象
鹿の角あい時雨まり　撥雲
菱角やころかさより秋の風　錦城
鹿の角幾ちよみけて鼾しし　彩白

菱角や紀の寄ありかけ 山川　二鳴

白魚

菱角やいらをくり咲ゆし 山　木羽
ちる魚や子に迷ひり隅田川　吏登
白魚や波よけの石ちかう　蓼太
ちる魚や白魚そふへと振つゝし　千慮
白魚や嗜ひて舟の窓　月巣
ちる魚やるしき夜の湊五郎　吐月
白魚やちいさい猿よ江戸の名　寥松
ちる魚よ何河躊の火影　白麻
此海ちる魚十篇おかりかや　深松

蜂の巣

巣の蜂の地をさしたるさきかし　大江丸

鳥巣

いと見えぬ所より蜂の巣に峰もなし　午心

鳥の巣を騒がしたる月日かな　普成

鳥は巣や暮し流るゝもの哀　艸石

鳥の巣や伊甲紫も見ぬ藤かゝり　月丸

鳥の巣に鶯あるは宮の松　音淵

駒鳥

断に駒鳥歌ふさむに明けはなり　午心

駒鳥の声ころびけり岩の上　園女

駒鳥や山辺の縁の絶えて石　大宇

歸鴈

川擬にたち去りいつも帰るかな　嵐雪

帰るとは見えずなりけり富士の雁　吐月

妻ありや一羽さはかし雨の雁　大江丸

菜畑の黄なるを落てや帰る雁　青雨

しら小雲月和さたまりぬ　可山

帰るより帰りぬ雁の行方かな　吏楓

都出て向ふ細やかく帰る雁　保蒸

雁小つれ行く夜の道かな　蓼山

提灯の灯に雁も鳴く　菅雅

居る...や西月しかる雁　升六

帰る...手もつけ雁　魚汶

...雁　求光

唐...雁　月巣

...雁　蓼太

雲雀

ち程より咲候ちらん雲雀哉　菅雅

川原の雲おどしさる田畑　寥葉

畑のうへぬけ時越く雲雀哉　蓼太

野風の畑を遊るひばりかな　曲川

松風ハ下にきゝてひばりかな　豊肆

古跡てまつ野畑の上雲雀哉　一貫

雲雀鳴下や遥なる大井川　月皐

榛原や月のさゝるにゆふ雲雀　寥松

まなかりあかんえて雲雀哉　中阿

夕の日は淪翔ちりゆく雲雀哉　有隣

もゝけふ原日は舞も揚雲雀　午心

燕

畑風やまづ一筋に揚雲雀　蓼太

二羽と成りて来し花行しつばめ　嵐齋

御簾に入て美人に訓す燕かな　嵐雪

つばくろの巣見て出けり都かな　蓼太

湖にうき巣もちらんむら乙鳥　完来

乙鳥や春の雪を払ふより　五斧

田を仮る子供に逆て乙鳥かな　山朝

傘の都に訓するつばめかな　雷堂

むら乙鳥寒の勧学ゆり　披雲

押上ては残るからぬ乙鳥　吐月

つばくらや大門の柱ふみをとる　可竹

雀子
雛子

まつ親の下淋しさしたふらくハ　吐月
つはくらや旅にあるかなきものゝ数　是物
木つゝきに見はさまれし花乃子　完来
雀子や大名小路人通り　大江丸
啼やさえつるにも雛子鶏　蓼太
おちらぬや麦の穂並に雛子　青橘
思ひ出す人の名きく雛子かな　三思
すみあれしき除生れ雛子籠　普成
かくれ家へよすかもなき雛子かな　素園
新あまみ檜笠白しや雛の鮮　稲丸
嵐吹て雛子や小松を捨て飛　寒松

蝶

酒くさき人にかしまし胡蝶かな　嵐雪
蝶の羽のさはりも切る紙衣のすそかな　吏充
つまむかと跳情を遁こそかな　蓼太
卯の花にまかりかへ飛ちかへふ　宜麦
てふ〳〵や川を出されし杉戸かな　月巣
人にうはれ光りこぼれて胡蝶飛　白窓
潟の尾に干て来り二葉し飛胡蝶　善成
附葉の先へ来てぬるゝ小てふかな　吐月
蕣の浴て影にかへあれは胡蝶かな　文朱
夕川蝶も鶯ひぬ花菖蒲心ある　加川　其桂

道に花ゟも花笑しき小てふかな　山幸
花小てふぬる小てふ我ハ人もなし　午心
日の好過きさえしくと垣蝶か　五全
正月を菊ふ二月の小てふ哉　言彦
東ら花ある人に連立こてふ　彭壽
常ちるを眺いる扇かてふ　女 須美
起きや庭より飛ぶ蝶かな　スルガ 嵐考
まふんとして流るん寄る蝶　寥松
蝶々や浣の女を訪ふんかな　吐月
閑さや花ひらこてる月のてふ　志碩
猿あし止まる蝶とおもいけり　一兆

蜆

角まてふ移ふれる蜆の蓋ハ何　班象
金色でむきたる付くる蜆の蓋　房州 瑞石
大和路や瀬中ち蜆売蓋て　スルガ 雪敲
てふく好こつそ傍まつ日の和仆　六窓
進みの碑に西日何る兆こてふ　漣漪
てふくよりて何せん蜆ん　菅雅
民として日毎に知らぬ蜆汁　蓼太
箸に掻き来もいきりし来てしけ　吐月
一字ハ書写して拾ん蜆売　完来
子の蜆笑ふての後も見やけり　萬山
来もやしまし蜆の味ふて味噌　州コヘ 維廸

蛤

田螺

蛙

涼しさや江を出て来る堀かな　白烏

蛤や焼せる人を旅日記　迂鶯

捨かねるゆくはなくし田螺かな　班象

名の花を嗅きもしらぬ田にしかな　士朗

鳴もせで捨らるゝ田にしかな　頓吾

よしあしや繻の茎と鳴く蛙　嵐雪

入月の後は遠くなる蛙かな　吏登

つちくれにかくれて鳴や蛙かな　蓼太

月低うと思へぬ夜なし鳴く蛙　雪萬

遠くふる暗の中の恋するや蛙かな　六窓

枝川に渡りきて蛙かな　午心

蛙子や利口になるしや寂しさ　溪花

梅あるやなしにて鳴く蛙　石髪

三井の鐘さへ田の蛙かな　提國

やきもとて見ぬ間に伸よ蛙かな　吐月

花ちりし跡まで梅やなく蛙　一湖

暮るゝ夜の細しなくかの川　曲肱

くるわの馬酔木咲くや鳴く蛙　菅雅

蛙なく泡ふいて居るまかな　寥松

畏きて昼さへなく蛙かな　楚岸

火かげつゝ忘れて咲や　菅雅

飯の時鳴て我なく蛙　乙児

猫戀

初恋きゝあて遠くすれは　螢布
思ひ寐の尾に蛇もしつ猫の恋　藁太
もち売翁もねころ祢二の妻　宍之来
三日月は眉掻かくれや猫か恋　不害
猫の妻いつ家の君か奪ひけり　嵐妻
笠着せてやらん百夜の猫は妻　故斑象
恋猫や眉更くる洗行燈　萬山
大の尾を端て通ふや猫の恋　子六人
閨は脂の猫をりたやね入恋　手南
猫の恋ふつゝと来て喰もはらん　未奴
恋れて口こなりくと女猫は　此君

接穂

接穂しるやさへ取らん猫の妻　普成
男ふと取り去ろおとさうめねらみ恋　吐月
思ひあまり猫をおちやる柏がら　大江丸
哉まつ家は猫も帰りる夜出ぬ　蘭更
恋猫の尾にかし恋の通路　百里
あさいとあ出もちより接穂は　嵐雪
瞬くし接穂く又て废りけり　一兆
吉野の桜は接穂のはな接穂は　秋杵
今しよき心のひまを接穂は　ナリタ素迪
四海ゆ接のと有ると云うをきなふ　蕗笠
作接ーたつきあ兄子事到来　つ了輔

木芽

ざらり木は芽よ来から木芽かな　二以虫

金か井の野木残もぬ木のめかな　咄月

隣たちる草の中は木芽哉　嵐猿

木の葉して園の野のつゝかり　月巣

遠寄て子は添ふる木芽哉　三上

まき雨の遠からぬこの芽かな　咄月

土筆

秋の野にあまりものをつくづくし　窯松

まさり降る雨は中らも柔らかな　画女

すこしとまゝかゆかつくづくし　我僊

去年程やよらして来る晒足袋　友琴

薊

花ねらも芝よと見へて薊かな　沂芭

椿

鶯のかりき目尻てさ椿の那　嵐雪

いきぬかくとおま椿の咲てりけり　月巣

ふもと乃花にも落る椿かな　一流雪

住ふりし唄よ出路や赤椿　孔涛

蜂籠に入りて落けり寒椿　牛眠

つらゝゝ椿も春は久しかな　阿郎

落ちるゝ咲さ散て椿哉　琳ぬ

そのまゝは葉らしに葉ま椿かな　淋雅

谷下手は椿は何ちら向てけり　薬太

山かゝ戸口のくらき椿哉　蘭吏

こちら向あちら向咲く椿かな　桜夫

蒲公英

争んでゝ小日の静かる堤かな　なよん

蒲公英や田ハ一面乃水日和　槿浦

蕨

狗脊ハ蕨になりて蕨かな　嵐雪

子蕨やこゝの山まで行便　鶯水

紫蕨の中に一把に結ふ哉　咄月

ゐねまてハ日をかんる蕨かな　一葉

蕨小の土を濡らすことに蕨　嵐亭

旅人の旅館かしつむ蕨かな　葉雨

小嵯峨蕨に蕨てもある蕨かな　歌季

盗人に網を喰しめて蕨かな　文些

獨活

ゆりしあみあハ獨活に似た獨活　嵐雪

焼野

心伏の枯大原にて焼野かな　六窓

春野

春の野や草より多き鄙人　蓼主

春の野に日暮にゆるかなと　推敲

春耕

多聞の人乃眉毛も春の野の春　去雲

種蒔

雨日くれ布留の小田をかへすかな　志静

種まきや朝につれて雨ハ青　卜水

苗代

苗代に老のちからや丸たまん　嵐雪

秋風ハ二葉のなし苗代田　蓼太

苗代やみても神代のかかり減　房只 走舟

苗代や木々の余りにさかさきよき　荊雨

嬉しき蛇もくるし苗代田　冨屋

畑打

迷ふらん萬代池の田乃蒲　氷花

畑うちやさすか鳴見しふり向ん　吐月

畑打は藪入連て戻りけり　方壺

きらおやあらたなけ道廻と　一鷺

畑打や秋のおくれを向ふより　午明

ちらちらや清まる風を膝の下　鮫牛

春還気畑うつ人も旅の　一巴

山笑

讃ある白子畑うつおのこ哉　ほゝえし

藻魚やむし笑ふる山もとり　吐月

春日

はるの日やたへなる讀經　麿 仝

打連て汐木拾ふ春日かな　暁基

春の日や啼て野外　女客　素友

鼓屋乃入相近き春日かな　海暁

駅くの富士画けり春日哉　暮谷

春の日や心ゆるして語る後も　林山

足袋提て脈を流れ春の日　午心

春の日や價いやしき盆の松　寥松

佛とも知れ春の日は新　月丸

水路て船をかかりける春日かな　霜葩

嫌らみ大世の春日哉　牛毛

空山す風戯のねる春日かな　仙菓

春の日や永田にいそのかへる　了脯

はつ花や三井の古き讀ハ何ぞと　連丈
汁の井乃海よあつまれて春日かな　凡嗣
春の日乃さし出りり天高　不鶱
春の日や諸余山城如来心　負之
春の日や門中く梵論の影もし　蓼太
春の日や光り何まて水の月　三鴿
造作よ身のつかれや春日永　甫華
春の日や何して見る七つ前　土丈
住ます人の瓢逃よ妻何る春日哉　月守
草乃家に人見えて風何ふ春日哉　涼花
雄ふく蝶よちゝ小春の日はしかし　梅巴

春夕

寺中に鳥居出居と春日かな　月巣
いかゞ子の送られ来る春の夕　幸千　文枝

春夜

春の夜を何れの談せよ梅の月　三鴿
春なれは夜や梅の薫る傘ほと　午心
春の夜を豁しけり玉何し出　暮人
春はれ夜や梅妙きな夜ひ　素迪
居ゐる夜の気名たる春は雪　起石
春の夜や忘れてかれた讀ゐる　十り文　萬古

春風

春風や一座小紀る室の竹　蓼太
又勝して芝居なかりし春は風　月守
命か咲く花とやき春の風　人左

春風のむかし勤はや雲は塞 不騫
春風と身に覚えあれ二月哉 披雲
唄ふともぬ旅人はなし春の風 蓼太
春風に砂子光るや波のひま 六窓
梧の木の撫しそこなう吹うり 蚑牛
何となく来ては見へ来る春の風 木羽
子供らは菜売の春の風ならで 百年
花蘂来を吹さしめるや春の風 白羽
春風の吹ためたきく燕かな 下廿 柵下
橋こふもあらはゆる柳風 梧泉
柳手居る人もあつし春の風 遥知

春の風障子の人を詠みけり 月菜

春雪

忘てはゆく吹やたかねの色 吐月
春風や吹こほれて小田かへ 完我
たゝ風の袖より下を吹日かな 漣漪
清水越る傘まゝんとの風 婆心
春風や見の春知らし雨 下廿 枝也
墨摺をよせて止ゝ春の雪 乙兕
見ふかした中に嬉し春の雪 月菜
はためくはあちこち降し春の雪 文母
招ひあらに降てめ[illegible] 雪菜
淡雪やなはゆる春花もの心 蘂太

手にうけて見れば花なり春の雪　百員

淡雪やかわかぬ柳に三日の月　和文

春の雪潮にとけぬめ夕案　青鳥

春雪や足跡に似たる鳥もなし　完来

春の雪道来ふる七つ下り哉　其谷

はるの雪鳥も力になる日和　下サ　月彦

船人の汲て捨るや沖の雪　咲月

鳥の跡赤城山やはるの雪　魚房

春雪は泣く降利何りも春の雪　泣水

さく菜にそれさへふり春の雪　ヲハリ　士朗

春雨の東野にて住居けり　サガミ　春鴻

春海

春の海岸まで寄て鷗の群　都上

帆柱に帆のまぎれ行春の海　蓼太

子を連て鷺の浮巣も春の海　不騫

廻廊の燈ともしつけり春の海　水衣

春のうく松はこゝろて夕な那　我耕

百里行東風の帆やなるみの海　午心

はるふりて採る野記せ春の海　長翠

春の海終日のたり〳〵哉　洛　蕪村

見えわたる遠き木は帆や春の海　素松

蒼々と白し山路や菜の海　鏡裏

春水

渡舟も柳あかるし春の水　蓼太

浙蚕をあらひ出したる春の水　魚紋
澄きりて淋しき春やある田から　雪茶
楊枝子来て八幡阿り春の水　年人
磯山や小松か中越春乃水　洛 几董
道江路やここも水の辺なる　十六 月居
春の水背戸に田作らんとそおもふ　蕪村
大ゝの小判あつやを春の水　嵐亭
浮草も浮おりしたる春の水　月巣
岩走る音ハ高なしはるの水　吐月
春の水平安城をめぐりけり　知来
さゝふねハ比良からふらん春の水　菜之

惜けぬ里くもあらし春の水　郎娥
小男鹿の踏こえし行里春の水　完来
春の水深ふてりふし岩(?)行　深松
高きけハ雨ふれ下く春の水　瓊田
はるの水竹の枝葉の流れ行　阿人
鶺鴒連て鶴見しり行春の水　虚舟
掉さして渡らんとするはるの水　呉橋
流れても流れぬ月や春乃水　一鷺
うごき出て鰹の来ぬやみつの水　梧泉

春霜

行末つきぬ葉に消え春の霜　可輔

春月

田丸から二日踏けりはるの霞　年人
さゝしろふ人もさそひは春の霜　楽松
伴ひ柏の蓬摘こそ声のしも　一瓢
春の月桜ちる枝添ひは葉　案左
ふみ見る心にあらぬ春の月　眠泉
忘られは忘れはしらぬ春は月　秋良
春の月思ひ増る不思ひけり　篶美
里たし作る東ふたつ春の月　両山
入りさいふみ解てやたる此月　雪窓
暁を人にも見せは春の月　春眠
小原女の餘ひ子すゝめ春此月　年停

春の月枯木にうけて残おさり　月庵
牛乗て戻る僧あり春の月　生甫
宮ふ尺見ぬ雨も浮く春の月　（スルガ）峰月
樹に風のさはりて春の月枝ぶ　荊父
いとみふよふ市の宵森や春の月　午心
春の月もれてさはりは流れけり　平芋
何さはかす尺枝あまきも春の月　楽松
見る人は蚕の田ふ静くし春此月　梵扉
松枝に登てぬ山やも歌乃月　木芝
宵の借たふしむしる也春此月　坂生
花散る蝶まけあふ月枝に　蓼太

春艸

かげ清しふかく見ゆる春の月　冨美

うつくしさ遠くも見ゆや浮るの月　序嫁

春の月昼あかし野山かな　女 まき乃

見しの日も霞の中やはるの草　扨梧

春霞

行霞ぬれて立りはるの霞　未门

春の山霞んで坊のやしろかな　午心

人の息をかけても曇るはる山か　梁松

春山

春の山松もたゞ八幡ぬかな　蒙雅

春山と言つて桜に薪かな　桑古

かるゝしみ出る郷なき春の山　忠峰

山清よ八幡よ春の山つゞき　冨美

春富士

見かへりのうんせて無也春の富士　午心

若服屋の曙覚もほしき春の不二　玄兎

まくら木に富士見えり関（セキヤト）乃富士　三酉

松原へ出れば富士あり春の旅　葎宵

凡巾

ゑふつくる人もいかのあがり　嵐雪

尾の下に我足ふみ人も凧　吏登

子をもちて後ちつくしたや凧巾　吐月

一休みも揚て見せたりいかのぼり　完来

月のふつけてかなり凧巾　故 班象

嬉しくも空に欲なしいかのぼり　素園

まる方に風の手がかり凧巾　長サキ 魯久

仲春混吏

几巾にかゝる遠しと知りぬ遠の松　鬼香

風もなきにとりぬる花もちらぬなり　雷堂

糸にかゝる妻の別やいかのぼり　萬府

藪入の牛おちてもいかのぼり　六窓

凪くて知れつ猶る几巾　吐月

玉の緒も長短何り以あり雲上　尺布

雨雲は大つまくや几巾　桃隣

九重の内も風何りいかのぼり　班象

月と日は万かくるゝや几巾　六窓

妻めくる下屋ふる川ふる川妻あけ　二万年　定雅

百姓の菜種まく借りて二月かな　普記

雛

三月

石女乃雛かしつくそ哀なる　嵐雪

いさ雛の端居もかくれ出る月　藥太

知られけり好む無尋何り桜の雛　宗林

雛にも何りたまきそのや使ひ小袖　餘城

見ることやれ思ひ出せきれ雛の顔　巴丈

まれの女は皆おかし人雛乃君　甘谷

居何まりて人手まてお知らぬ　吐月

まつりき集かく之はり讓る雛　子真

妻の相乃雛に接しても知りけり　紙川

紙雛やなくなる讓り又出つる　有泉

つましくと月見んて来る紙雛　蕪子支
ともし火の光にくらきひなかな　兎汲
女なり雛の基哉つたなしい　冨居
都風は移りし紙ひゐな　晴山
雛立て母なくさめる男子哉　金井
りふさ文男かしまし雛まつり　（カツサ）月嘯
画に描るむかしをいるくし雛合　郎娥
價なき雛見とまる人丸内裏雛　文丹
消る灯の雛見月の嵐かな　月守
門にまろ見をはめや紙ひゐな　故班象
川外乃我夜ハ淋し雛祭　遊志

人まよそ見あきらん金枝の雛　寥松
紙ひゐな出の跡より人こそれけり　也好年
後くしきを祈りて雛の君　得吉
年くに描へ大なかぬ雛かな　左皐

曲水

曲水やうしろまつはる夕日山　淅羅
盃ながや人まちかふる河白　白川 涼耕
曲水の流りや也まざなり隠　年ん
曲水や芦の折節も遅き出る哉　寥松

雛合

きぬくの後としみより雛合　渋めん
さくらは影ひも何れんやり合　柳糸

艸餅

草もちは深つくしん草の餅　嵐雪

裁縫も女ありけり草のもち　蓼太

[illegible]

義秀に門敲せよ手の鼻　仝

三ツ葉芹

かゝしれはむ風にも嫌ふ三ツ葉芹　月居

胡葱

ゆきつきや寒き胡葱で女文字　蓼太

寒食

狗の大も寒食の日の払ひ捨　水也

寒食は二日となりぬ桑門　杜急

寒食や燈もさゝぬ眉かくし　年心

寒食やけふもれすハ磯の浪　眠家

寒食や夜半もあらぬ鉄火箸　荷笠

寒食や灰にまじてまつ枯柴　寒松

汐干

汐干から将蟹猿引も行　嵐雪

二里ほとハ月に戻る汐干かな　連牛

捨られて飯の猿なり汐干かな　吐月

帰り道女まで鍬の汐干かな　蓼太

かゝしるは目を捨る汐干かな　一瓢

百文の小家を見ぬ汐干かな　朱義

小鮎

小鮎の脊ふりのなりの帰ゆり　蓼太

小鮎のはしりぬけるや古筏　卅志さん

若竹の内ハ鮎ともいはぬ里人　左生

海苔

比路の宿のあり一海苔二枚　蓼太

桜 附 桃

海苔ひろふ下りゆきのさらめ　吐月

紙白し海苔とる蜑の耳はさし　宇松

京への海苔刻ミてくハせけり　赤橋

三月の地にも傍ふしさかる艸　老河

桃のりや饗に貴人を笑ハせて　嵐雪

山里や桃ちりける噂着　蓼太

むさしのや桃咲ば桜を果しけし　湖羅

桃の花さかさして吉ハ畑に行り　祖白

ゐたさや桃の中より汚きさ　振鷺

三日月に見て也桃を見りぬ　茂林

桃さへ見ぬ桜花てのもしき春　出羽 芳湖

人口で繁昌る町やさくらの花　麦路

葉桜に折てそれより桃の花　兎石

余の花乃桃よりくるゝ二日かな　圃竹

花ある所きさらぎに喜し桃の花　湖羅

麦の中に見えて八桃の花見かな　大江丸

むつくと雨もつ河岸の桃の色　長斎

湖川の流して桃の散りけり　竟鳥

花ちるや籬のうちの桃の佐京裏　三酉

黄昏につま数へる夜も桃在家　吐月

厭ふにもなく隠もなく桃の花　大河

桃の月や女に似たる京の児　菅雅

集とれハ硯や浮き匂ひされる　嵐竹

入月の宵中に宿し遠桜　東登

世の中ハ三日見ぬ間に桜かな　蓼太

方々て夜さへ出る夕桜　宜麦

おもしろや散るにまかせて夜桜　吐月

折りて人間たゝるし[illegible]さかり　虚舟

[illegible]ひらつぬれて[illegible]　雪[illegible]

[illegible]桜の恭しく見ゆる桜かな　人左

さかりとも咲かるや花もなし　完来

迷ふて桜見ある山路かな　大方

桜さく人の何さも賑ふ　荘丹

三月に見きそのさかりかな　沙石

見[illegible]桜人　普成

あさくらや年に桜かる須賀　故 郡気

大桜[illegible]人の[illegible]　月巣

宿立て何も桜見月ら　文臣

みよし野や遠まて人ハ遠さかる　秋枠

[illegible]ハ桜なるらん山さくら　不寒

此中に道をひかしまさる人　一[illegible]

山[illegible]人遠さかる　出羽 投茶

白[illegible]つきる人々　祇風

植木屋桜散りしは[illegible]　伊豆 官嵐

咲とも笑ゑてゆく桜かな　人左

見ひかてしろふまさり々桜　李咢

夕霞よ桜み花こ汐をそ　蓼太

きのふ見てけふは吉山されらかな　可圓

山さくら人をうけて散りけり　覓平

傘にされし暮て戻りし日かな　雪峯

山桜一時に隠れるやみなかる　鬼孝

散るや桜ちるみけるみけし　沙羅

入あひや散れる人を散る見人　生飲

咲しき日に散る桜かな　梅京

ひるまえさへ宿の花かな　宗松

花笠もかゝる川やすけあり　北魚

散る桜一つ散れる月夜かな　蓼松

見あらぬ人の花にひらめき桜　一得

桜これ又奥州さしける折　蓼太

さくら人みても心よ雨　洛 蘭交

桜し詩に下り水やちる桜　吐月

散りきれしきのこの人の跡さくら　秋良

咲くらつくしさりとも散る　雪雄

さくらや芸桜のみけむあるし　黒露

かれ日も散らさこれ山桜　嵐腹

夕桜色香せまりて去年かな　伏見 草阜

迷さくら牡丹に靄を合せけり　故班象

晦日おもて揺れ花見されしかし　有巣

ちる紙みえの出棒つ也さ合点　一鷺

鈴鹿の七ツ日しのまつさくら　魚汶

岩すみや醉を吹くさぬ人　花足

佛心のひよ川ゝ行く鈴桜　卯毛

おさくらつる何を成ん　萱雅

急よさくら咲日も拝る扨　班象

ちるぬ人乃打て且くり山桜　午心

夕さふらみ出ひ塔るをくれ　楓白

陽桜あり扨ら桜も皆合点　珪林

さて綱

花

花の豊隈なき景を汲むよりや　乃軸

味噌漬と忍ぶてうけちさくら綱　一貫

何れ行とも几岩ある花の山　嵐雪

花さくや拝見又古き山法師　吏紀

成佛の樽りらん花さくら　篆た

花の山寄とおもひ行佐仙人　完来

下戸ひとり花の宿を添世けり　愛斗

樵夫何を俳あり花の歌仙　周竹

かゝる日にあつまれ出めちるさくら　人左

和尚の嘘隠しぬけて花の雨　沙羅

ちる花や花よきつけき圏両　漣漪

はや風かろく来て吹寄酒の泡　嵐雪
旅病のはれくて花よそろしれ　文亭
夕暮や花のもどり数比丘尼　雲峯
花の浮世百花のあらしも身に　完耳
花にまするこよしの人の命心　六窓
姿笠や男花踊なる花の上　百里
花折て女の力見せけり　吐月
さそふやちる時花のよし山　蓼太
折らんとは清かんよ花一眠　月雪
生て居て花きる山暮し花の上　南丘
花も盛し風は余の木を吹ぬれ　宗松

白妙につれて花の盛り菊　潟成
花咲て先づかちらぬ花の上　虚舟
後の世も人と花に見ぬさかり　豪山
花に花やおもしなる枝上　班象
花つ木下に便にて咲にけり　魚跂
ありかる花に出し花の月　天府
花に来て城に筆終山路かな　芦洲
四十にて花に進かる捨気に　花明
咲花は出ての下のたよに生　指月
折まくと折らせて花のまに　蓼太
山里や待ちぬる花に不きん　杏蘭

山よりて人れて嘘と花見ゑ　求光

源氏程の松をすりよ花の山　亘交

居るして花乃あと初る枝は　午心

数されし桜もと彼方を　雪珊

多ふ冬まふて見ん人ふあり淋し　完来

花の山京の人くれハうかもし　阿郎

花の世よあくて見出しふせ山　故流

烟りよりよりきもし花の色　冨屋

多ふれて妻宝のりおみ山　兎条

花よ見り花く人ハ閑まり　玉桂

傘さして見るかく花の都かな　葎太

花の山今ぞ行くと別きりり　沙鶴

おもしろき筆て其の吟よも見て　吐月

海よまて心無しも何せん里　帰凡

帰路ま花よちる尚生の那　普成

風涼ハて新しく花乍西　得魚

夕風見も起きて吹く寿気は　江草

木多き也や枝葉の上よもの数る　好秋

何くまくも見える日かけ　桃長

嗅何りく花もの都ちる　文路

花よ君多りて何をも辞すへき　涛風

ちるさハ花よ見よる事かな　正魚

春雨や咲んとすなる松の雪　蓼太
春雨や来ぬと除とは見えけり　人左
旅人のうしや時さよ春の雨　蘭尼
傘さして着るも法るゝみの雨　沙羅
春雨や伝つめて松の下家　六窓
細々と以ふて来し春の雨　丈足
春雨に人あき兎ぬ風の袂　蓼阿
家陰の古さ賑はや春の雨　自深耕
春雨やふさんとつけて柳の芽　吐月
春雨や世八春の案の枯薄　社月
春雨やこの寐かな法師の音　西羊

雨ひと松春雨の人の絵　雲人
雨もくたびれ春雨の浅田　旭鳥
降もりを春雨も晴止まぬ日の卯　月策
春の人春雨の浮世とまかり　大江丸
春雨や都見て書ふさけの音　暮鉢
春雨や鶴の仲屋の下家　豊扇
京やぞ京の酒や春日雨　阜嫁
春雨や止むとすれば夕庵の　一雨
はる雨や鶴ゝのとふ竹乃花く　六窓
春の雨硯に向けてこゑ書ん　蘗た
雲乃降る日は二日経る春の雨　十六　八千坊

うちかへる土の匂ひや春の雨　午心

いふまでハ杖にもふれん春の雨　八夫 風宜

覚て降揺て降りはるの雨楽し　嘉永手

芽葉萌しのびのてりはる雨　五雄

小雛ゝし哉死はる雨見鳥　梅仙

春雨に寺ぬらす椿の　ヲハリ 士朗

出瀬に傘かしたり春の雨　宗松

春雨や扇の上乃小人形　蓼江

春雨も村まで青き生菜屋　秋良

春雨や雀の巣手持は藁　川エヘ 吹万

さくら見もかくれて歩月夜　カヾサ 淮江

菜苗　董艸

呉竹の葉おし下し春雨　鳴皐

春の雨こちらし降やらぬ　拊翠

根冬かしの夜ふをやとぬ春の雨　畝六

きく菜苗や植て揺あまを候ち　不騫

人好まぬ部をつかみすみれ　蓼太

春雨されおもはぬ牡丹　月巣

見つゝつゞくて呆きぬ菫かな　吐月

海の晴や小貝吹中のちら菫　杖露

東風吹ひ吹や董や多　翠羽

くれ出の椿のつゝじの菫かな　ヌカ 周夫

笄に花をくちけりすみれ草　翠兄

茶摘

茶摘さへみえて松吹く風も山路かな　班象

雨止て暇されぬ色たちぬ　宜麦

茶摘の声けさ中より茎かゝり　濯義

人をくぬくや摘み来はつれ茎　五柳

兵の茶摘も中ぬ声されて　仙菓

花さへまさきへ人もつく人揃ひけり　升古

心こそきこ子小はましかの茎茶　完来

茶摘ひく摘ぬ葉つゝ笠　蓼太

取くかし声たる茶つゝらか　故班象

町中を横にきれ行茶つゝ人　松露

川音に眠気さしけり茶摘唄　泉山

何の笠ぬきて見たる茶摘かな　一考

躑躅

舟からも見ゆる宿しつゝじ山　錦城

躑躅の燃るやうなるつゝじかな　牛歩

今様らつし咲けり躑躅の上　吐月

山里やつゝじの坂も戸口より　年心

つゝじ提て法師を通りけり　寥松

かゝる日に捨てゝも誠すむやつゝじ　菅雅

海棠

海棠や折られて来てもなまめく　蓼太

海棠の重る人をまつらん　虚舟

うい太らは沈みにたつも戻り行　文母

海棠や笑ひし迄ての淋し　吐月

梨花

藤

海棠や雨にくれけり梨の鮮　山李

海棠や咲かさなりて艶らしき　南寿

引しは時々花にしきり梨子の花　完爪

おしいかに手もとや梨の花　蘭亭

小坊主よ入ては雨ふらん藤の花　嵐雪

投かけて雅な色こぼれ藤の花　吏登

藤さくや雨田の中に神の杜　蘂太

いつはりの世にかゝり藤　不寒

多川山も遠ざかりや藤の花　人左

つまおしき人見た藤の花　吐月

　完南

山吹

明ても投たる色よ松の藤　年人

藤なみや風よりも外に　蘂松

日もてりこぼれて此は藤の花　外古

藤さくや松にもかゝる藤の花　蘂舟

みしる緑を夜よりも藤の花　おも

呼にくれしくや　羽人

藤咲て首途に藤の花　去留

行人のしはしは藤の花　嵐扇

山吹や花に入れて　蘂太

山吹の花さきて浅井　父嵐

山吹や岸の水に　曲旅

永日

山吹や垣根なくて打崩し　文足
山吹や花折まで上より　芦舟
山吹や亦棲ものゝなし　寒松
山吹や蛙の座る傘の上　群人
持添る日まきもの出来ル　葉大
永日や淡き霞をひし出　雪篤
あたゝかり子等笑ひて為る見へ　午人
なかなかや持てる人の群　柳湊
永日はもうすぐ果ぬいつま　松供
永き日と思ひしも暮れ住まれ　猷鷲
なかなかや外そてそえしもくき　得十

炉塞

炉塞て二日座らぬ座敷かな　琴太
炉塞や月ある宿のうれしさ　完来
一日の炉に松風の名残かな　萬山
炉塞て旅立つ気や其炉　秋色
炉塞や桜の枯葉を一焚心　然水

行春

行春の笑た笑ひ行かし　蓼太
行春やそれを持つる鬢の髪　月棠
行春やりよ八重の扇哉　山幸
恋なきに行春の芽の書　普成
行春のんびり去る川や子　吐月
行く秋のさしまた春の行春　黍町

ちるとてハ見ぬ花の名残　雪窓
ふつと坂の月につゝむや花の暮　桃醉
よい連のやうふり花見ゆかし　大江丸
花惜む松や松風の音静かく　梁松
散花に立出でゝ遊ぶ道さかしく　出岑
ゆくはるや一時に咲て花清く　可吉
散花や花の頃散り人あらん　桂雨
花も咲て散りも見ぬ日の芸　惟馨
散花や露に花散る鯉舟　蹊泉
ゆく春や志賀の花に花の風　桃涜
行春や椿の花を泣相に　定木

三月盡

花散りてあふ花の別れかな　蓼大
大松に三月尽のかけりけり　月巣
高風の名ハ三月晦日ゟ哉　文足

𣪘句類聚　夏部

青飯盧了脯編輯
八朶園寥松刪定

四月

立夏　夏こゝろきのふの春を何ぞ皆　了脯
ついそこへ日の都する夏は来り　寥松

更衣　浣の鳥花裏で見て出るもの　嵐雪
かた袖を惜しと思へば更衣　史登
橋ひとつわたりて高し更衣　蓼太
那好れ女子をそむしき縁もなへ　連太
寒さぬく袂に高し更衣　完来
一日のたれこゝろあるもこゝろもちへ　普成

出女乃七つさかりやころもかへ　魚汶

橘に向て気嫌ん更衣　正母

昼すきて青葉やいさん衣かへ　楚水

何となく身はかろし。更衣　冨屋

更衣おもしも生て居て涼し　栁絮

着る身ふるく何んころもかへ　吐月

園雨を見ておかりけりや更衣　李芳

行里にもの好信ありころもかへ　梧泉

春月の衣えうき女かな　巴人

更衣る上中しく　嚏　以星　治梅

ころもかへ心はあはれなし　月哉

呉服屋に盃出けり更衣　一弥

衣袖もちへ二日か心くみ哉　京花

孫ぬきつや杖はおいて更衣の忘　月花

昨日まで青葉も笑し更衣　含嵐

白重

孫ある侍に笑し白かさね　紫雪

白かさね小く者齊藤にものせん　萬たる

始めふたつおやちるまん白重　秋風

鳥羽の社に入ぬ衣かさね　秋梓

眉根うく都に扇やしく重　淡魚

はふきはおかさね人まれ白重　射皐

袷

鳩を然ふ枠られて袷の角　嵐雪

青簾

ゑれ蛤の先呼つゝぬ袷かな　時中
手枕の十ヲあまりある袷の邪　零松
袷着てかろき浮世と思ひけり　閑牛
いさぎよき上は人の袷かな　虫尾
男らし着へ着てあまり袷かな　鳳足
薬師の末なる人よく袷哉　月巣
袷着て先をはらむ行けり　起翠
一日に桁りかへすあまた也けり　吐月
五位に位包こき衣よきかな　嵐雪
行さきを急のはじめ七すまれ　蓼太
桃あけて青柳淋しきかな　菊平

茗花

旅月は溝ておもりさすされ　和水
下り燃ん舟てうまりしき笠ゑ　桂露
絃合のうしろは涼し青すだれ　得魚
かゝ声てよるさ恋しき青すだれ　吐月
笑ふまりたのやきやこゑは青のすだれ　月巣
稲子ハもたぬ風何の青すだれ　下サ　飛燕
鳥影の簾也たまちきすだれ　普成
似ても家は京に媚えけり　吐月
母にいふ猿の胡坐や茗は花　蓼太
松ヶ枝に花あれて向しこ寺の宮　人左
日かも松の上か行らん茗の花　一貫

灌佛

何うて咲ても淋しこけの花　吐月

白雲の抱よくちや芦は花　眠我

灌佛や廿日さきる庵ほり　吏登

灌仏やりふる楽すする柳かけ　蓼太

天竺も耳お仏の產湯かな　完来

翌捨る家見ゆ川お花御堂　吐月

桷櫨のおき葉の花や佛生会　四明

詣らむ打つたりん花御堂　秋鬼

佛にも一度も湯ある產湯かな　六窓

灌仏や見る世くらぬ玄佛　蓼主

花御堂ぬ清らもあまきかし　蓼太

一夏

丈六も見ゆ出て花御堂　吐月

おもしくも生れ給ふる仏かな　加賀 淺川

玄明とうる数日れふ花御堂　栖鮭

後抱も別るる朓し夏百日　蓼太

夏籠や言て囲み想ふれ　宜麦

目をも川て夏中の手錢かな　完来

夏籠の人に寄るら日数を第　午心

石も坊被て夏出比硯かな　雪珊

下々壁の見ろへせたる夏出かな　銀耳

夏籠や見ま之て了狗の宂　嵐齋

氣寂え寂お男れ夏書かな　吐月

松魚

夜の錦七間しヽアな綾の京　嵐堂
夏百日硯も芸は滴る南　鬼丸
大勢は中へ一本かつをかな　嵐雪
魚ハ江戸に君子をうむや初松魚　吏登
面白の書ある宿や大川鰹　蓼太
人中を搖てゆく初松魚　吐月
百里経も一時の松魚かな　鳳宿
まだ夜のみよらぬけれて鰹かな　大井
魚市は忽淋し大川松魚　如水
走込舟より先へ初鰹　和文
先てははや掛て飛ぶなる初松魚　蓼太

新ちやくし奢くるしきかつをかな　錦絅
口上の読きつる家初松魚　月守
江戸も江戸一筋道や大川鰹　茶嵐
海遠き身にハ生よになる大川松魚　秋枠
旅好の身をて退ざる初松魚　吐月
分別の外ゑ味也松魚このたび　秀太
阿し我の講釈滞る鰹かな　文足
窮屈に鰹を出す何もしら　百里
さすが都いまさ鰹をもてはやし　二梛
ふぶ女がハ花にぞ隠れし初大川松　蓼太
まつ大川松の葉と詠む鰹かな　寥松

卯花

いまさらに卯の花垣乃何ゐるしから　完来

卯の花に来れは朝露晴てけり　雲堂

うれしさや京女房乃つゝら笠　魚観

卯の花やくらき屋ハ文杵の音　友蘭

お須泉の多に卯の花見る山路かな　人左

郭公

け燒越月の松かせん郭公　嵐雪

人肌に老乃巨燵やほとゝきす　吏登

見ぬ妻をこゑに出して鳴る　蓼太

燈火を消す嵐やほとゝきす　完来

鳴そ行後へは雲井の子規　晴里

郭公余の音は細るゝ郭　物我

宇渡はうしろ乃おきまきれ　吐月

郭子寒よこへたる子規　月巣

ふるときす忘れて僕を松かけ　蓼秋

き松中や谷深よりほとゝきす　阿人

鳴る名栢のさかる暁よりも　年心

忘れたる声初音何かほとゝきす　秋良

激臺へ鉢入んかとほし　婆心

流るおにそ人もなし郭公　寥松

暁の星嬉もよしほとゝきす　黒露

鳴るや宗ゟ蹄登しても出ける気　蓼太

おそさ寺の初音こそ恨なる　樗良

夜あらし子規の白ひやみしかき寸　月棠

時鳥忘きて傘戔人上るも　吐月

濡てくる独菜の船やみしかきな　蒲丈

子規鳴やたちまち廿日草　白麻

山伏の甲斐あり花子おとゝきす　黎阿

時鳥聲下に寄るはちかうけり　江尻 雪道

郭公先声きく鳥を夜もあけり　得魚

負けり日も暮かゝる夕に降　河翠

聞きては我郭公屋せむとつまは　黎太

藩雀み嵐時中やほとゝきす　故 玨象

杜宇声そゝ流るゝ浅あ　宜之

亡き宿の経も行はなかとゝき漣　方壺

西行子ぎ瀬いよいよ不如帰　黎主

夜桑つむ里乃明りやほとゝきす　入ルカ 峨月

郭公夢を乱しも聞ふ鳥　完舟

忘る人を知ると空井の時鳥　謐心

寺を枝おし様て聞ざきは　百里

覚る時中夢やなしほとゝきす　山幸

時鳥見て嵐を返す枝の郷　子交

夜深の行か忘ればよき川 時鳥　素廸

ありぬを夜の鳥ありし郭公　黎太

郭公聲もぬ皐月の油皿　了輔

麦秋

旅寐してみるや麦ふく秋の色　蓼太

麦秋に狩られて空を通り雲　呑雄

むき秋や一樹の蔭乃かくれ消　得魚

ちやからふし京おもて麦畑　氷花

秋麦は嬉し炉菜白気に山路かな　黒露

乞食せん世をわたりてや小孫麦　蓼太

葉桜

出女や夏となれは麦の秋　吐月

葉桜やとふ人乃たまあり　故瑚氷

葉さくらの浮を結はん花一枝　可備

葉桜となりはてしたる日和かな　士峰

葉さくらに気字探す汀かな　芦海

實桜

実さくらや狂ひ粉々しき吉野山　蓼太

実さくらや此粒ほとは京の空　吐月

花庭にあり来りたるほうれん哉　嵐雪

為ちきりしてくる桜にのほる那　蓼太

牡丹

牡丹散りて打かさなりぬ二三片　蕪村

日は午の尚静りて牡丹かな　大江丸

むくれたるもまた清きる牡丹かな　武多

暮まへてやる車あり夕牡丹　尺蒲

おもふことひえて咲る日出牡丹哉　菱裡

牡丹咲てせはしく来ぬ清水の妻　瑞雪

掃よせて又一りんの牡丹かな　吐月

白雲の中より出てぼたんかな　蓼太

此頃の日毎咲てちらんか菊　吐月

あらふおもき色の四月は牡丹かな　嘯斎

植て見る薬は種て牡丹かな　淙松

此庭に人集めたるぼたんかな　大江丸

かゝり来て宿やめる日の牡丹かな　春鳥

春風の或日さしたるぼたんかな　五柏

古の家に残る硯や白牡丹　可月

浅からぬ棘て咲たる牡丹かな　沙羅

百草に戦ひ勝してぼたんかな　他家

笋

竹の子や児の歯ぐきのうつくしき　嵐雪

笋や窓子かくれて亭主ぶり　蓼太

たけの子や傘掻添て穂之し　沙羅

竹乃子の竹となる時月朧　吐月

芍薬

芍薬や今朝降日にも咲にけり　米汁

卯月

胡麻くさて半ふとりたる卯月かな　幸厚

卯月哉や雛おりる七の茶　寒松

常磐木は果に向く卯月かな　素迪

芽を刈て四月も末の高みかな　山松

松風も耳すまされて卯月かな　巨海

杜若

人々の扇あつめしかきつばた　蓼太

傘の下草くらきつゝじかな　吐月

紫も色ありて媚あり杜若　年心

はなの後余所ゝハやかきつはた　桂花

今咲を待て代ゆるつゝじかな　カゲ川 史鳥

隠人を嵯峨野にハて杜若　スンプ 郎娥

杜若散る蝶色ハおなじなり　落笠

かきつはた山家の業に咲おくる　寒松

田に配る家も端手やかきつはた　雪洲

ぬる道のはしに沿しかきつはた　不髪

青も芽て所流るゝ葉哉　菜平

浦て取る人もうつくし杜若　鮮長

橋杭ハ伽羅の杭なる杜若　大蛙

手もとに切てみれバきつゝじかな　星衣

青葉とみ隠すりのきつ川はるみ　嬌丈

春の日に今日に隠しかきつはた　踊象

杜若男の担てもよきひし　文鋪

隠のみの庭も葉かきつゝはるみ　可求

蕗の花に添ひ行かきつゝはた　大魯

杜若橋をさしいて咲手に久古　蘂太

かきつはた傘さして切ものり　一蓑江

ぐ身津なき葉を撰む乃は咲居る　守心

よく見れバ橋や葉子哉　波光

夏柳

何となく枝ぶりちゞむ柳かな　葉太

枝ゟ地につゞいて動け夜柳　松露

紫柳や芦の影ゆれ丸木橋　三囿

閑呼鳥

[illegible]閑古鳥　蕪太

[illegible]しげり　信中 柳荘

桜より上に旅あるかんこどり　羽卒羽

人丈の草より も呼声閑古鳥　如雲

つまさきに出ぬ度ぞしたゝかんこ鳥　吐月

若桜ハ[illegible]し閑呼鳥　牧之

夕暮に夜ニ[illegible]閑古鳥　不騫

[illegible]　[illegible]

[illegible]閑古鳥　[illegible]

喚おこし夜の何ちやかんこどり　言彦

[illegible]人なし閑古鳥　探楼

[illegible]　月翠

竹きし木をしのび閑呼鳥　蕉太

西ふや二羽おく里は閑古鳥　好牛

呼[illegible]閑古鳥より　舟古

茄子

[illegible]初茄子　蕉左

[illegible]三人の客や[illegible]茄子　蒼山

[illegible]茄子の一夜漬　青年

ちいさきも又[illegible]茄子　吐月

短夜

たつ茄子や糠味噌桶の花ふゝき　左株
宗く茄子枠にかられ砂茄子　吐月
ききたれみしか夜ねるとすれしぐ　不騫
人ゝあの常は時夜の夜明かな　蓼太
みしか夜や何時からも杜若　沙羅
短夜や愛時ある明かさかね　也有
明けて短夜一夜二夜ぶり　柳条
みしか夜や懈く遠入る日は嵐　披雲
短夜に横たへり籠筆琴　荘丹
みしか夜は為あきぬの空　一山
短夜を築乃細は夕かこの月　同渓

みしか夜や五条八雄を枕もと　吐月
短夜は小暢すもふくし嵐蹄　永古
なつの夜をそれ後月はまりぬ　菜兆
みしか夜の京色を様の寝道　朱茭
夜の夜や毛生身母基とく須　寒松

若楓

湖雪に雪ひまさくし若楓　青牛
若楓柳見るを後世をあれぬ　於雪
京八様秋より嬉し若楓　吐月

蝙蝠

かわほりやむかし此京み様扇　蓼太
蝙蝠や遊女の灯とく瑞籬寺　馬勃

新樹

里は灯をふくくする新の若葉かげ　菊参太

ゆふぐれや花葉に縫ふ細ながら　蓼太
ふる穂なれ花咲くも花葉かな　吐月
折るゝ雨の音哉強る花葉かな　完来
売られて折らぬきは花葉の郷　沙羅
見えぬる中の濡色深き花葉かな　古竹
新しく雨は空ゆる花葉の露　路象
岸よりの濡色おしく花葉かな　月丸
露は蓬も花の心見えぬ花葉哉　都松
傘のちいさく見ゆる花葉の雨　巣兆
かけ竿はつるゝよ庭の花葉かな　金松

蓼祭
神風をもたぬ螢や蓼艸　葉今

蓼艸
ふるさとを出て古さとの蓼かな　月巣
花みだれも宵の蓼の五六月　蕗蓼太

盧橋
何となく呼ぶ声橋の白ふ柳垂て　月巣
魚橋やせなかは水に霜の声　西啅
夕ちかき深山の月の白う柳　五秀

葭雀
鳴き出しつゝ葭切は渚にかゞれけりて子　蕗蓼太
字はれた淋しき葭や行く子　洛梅
蓮くらふ葭切がほくろきの川　宜麦
乱れの連き葭切けりて子　文足
鳴つゞける柳に葭切けりて子　何者
雷雨をききしくやきやうくし　上り　其流

紙帳

よきりやさらしくれては広の浦　黎ノ太

葉添ひ来て居る紙帳かな　今

小人閑居して蹲る紙帳の中　月宇

酌捨て尽すなき紙帳かな　柳如

櫻散る夢ある紙帳かな　漁光

宵あかり見きらさる命帳かる　吐月

老の寝覚の夜のさひしき紙帳の中　斑象

何する人のかくこもりたる紙帳かな　楠舟

我庵は紙帳かけて寝るよや　藻左

紙帳や命帳の白への歌ふし　古一　夢記

蚊

蚊のやかましや寝れて外であり　故之

孑孒虫

かれ芦の蚊になりたる隅田川　雞松

ほうふりや桂の上にみる月　吐月

陣笠に孑孒湧て此ころの夏　楮叟

ほうふりや水むしは法のみちを　壕夢

蚊幮

身ひとつは深き幮の四隅かな　蓼太

おもはる幮を人の深山の中　完来

旅の蚊屋似し身の上を語りける　宜風

蚊屋つりしく一おもふ夜の中　とい鳶

瘦んや幮はつらくる夢もなし　吐月

蚊屋の月思ふくも詠めけり　年人

とりかへす浮世の外をかやの月　助章

蝿

みよし野に蚊屋せつれて詞哉 年心

寝ころんで蝿追ふ出月夜かな 蓼太

つまとハ思ハし蝿の古川仙 治吏

極楽の四角ありけり蝿のちち 吐月

蝿追ふて飯粒蝿に行くなり 嵐窓

蝿ちちやまされた又蝿もなし 冥春

かりそめも何しきてハあふ蝿かな 菊ね

いつしかに上手になりぬ蝿打

濡て拾ふ蓑みさいくやる乃蝿 善成

力なき蓑や見らん蝿か蝿 羽笠

蝿とむや風呂まうける棒の上 戯雲

蝸牛

蝸にまで捨られた蝸のちおつり哉 長梧

雨あがり生て蝸ありし蝸たたき 歌白

蝸のくし心のささを立まはる 暁臺

蝸ただき家ある身のひとつかな 枝月

一雫も持て春なし蝸ただよ 郷首義

おの蝸殻声なぬもみをもち哉 其馨

老の露や角よ日をもちるらん 嵐雪

忘れぬとはれぬもよし蝸牛 菊参太

夕かほを結ぶ這ふて蝸牛 我堂

見かつ我ある丈やくらひのかり 連丈

梅かりよ何より葉末の蝸牛 大にた

一夜鮓

一日は夜をまちてあかねるらん鮓の鍋　斗南

玉ふ川さいて逆し堰牛　恕曲

かゝつかり石より落たる音さき　氷花

我おもふ枝そろ這ひは蝸牛　青牛

心から翔もあふんかしつらり　午心

花盆をこ屑れて淋し蝸牛　析義

いそかは人を見せよいらん鮓の飯　蘂衣

鮓圧す桶くふかゝる心の那　以月

添助鮓讃甚も長し古猫に　沙舟

いよ桶鮓すしと泳ぎて根寄れ　貝喜

何さし蒿き飯というらん一桶鮓　旅白

鮓の壓かろきも世にあはぬ介　秋長

木下闇

蓼ふ齋足せて長し鮓一夜　蓼太

下つ屋や地虫あかりし塚の跡　嵐香

下つ道に蛇をみ闌仏の影　蓼太

音虚まる出ひおおせ木下闇　天馬

下つ闇や里は見す筋々梓乃音　千友

あさにあゆみぬるや木下やみ　豪山

おゆるし此の枝さしや木下つ闇　少言

夏野

川見る諸ゆ風何方夏野原　完来

田植

杉午日をうたひ去りし田植小　蓼太

田うへ笠嫁が折子をきすゝめり　大江丸

虹たつ帯ふる里小みせの田植かな　不騫

植そめて降るぬ月はちぎ田うへかな　蓼阿

うしろより見るやおきさ田植かな　花兄

行よしみ沖も満うん早苗船　洗耳

休む時ゝ本近つきの田うへかな　月巣

早乙女の植さやうしいつゝ川松　吐月

母の新暦かしくと田うへのちか　曲肱

水子町早乙女をまつりまえかな　月居

夕アの田植ぬさしとうたふこと　狐白

額みるもてきやかに田うへの節　諸九

田うへ唄山のうちもらくけき　嵐堂

山陰や人目おもはで田植唄　蓼太

植るりも八束に拡む早苗かな　完来

深合の御所のうちなる田植かな　菅雅

玉苗やうつるまでに二月　梅仙

早乙女や夢ちるとあぬけらひ　六窓

笠へんとすれは勤もや田うへ笠　吐月

一二本抜有ぬ蹟て田植の字　三鴿

呂ひとり田植る男何をかれし　僕水

いとま休うきし田植の夕嵐　カヅサ　可一

早乙女やいまふき水の古やな　梅渓

今の我植渡しより門田かな　筑前　計圭

花柚

ゐる代やんのゆする梅子菊　佐國

ひらけて月より淋し田うゑ笠　蓼太

伯よしみ花のひろゐり田うへかな　一兆

傘さした人のゆかしき田植かな　班象

早乙女や短き浴衣の若葉哉　東滄

植る田やあかるく濡の雲の色　一鳳

青雲の露降る日和家の苗　寥松

色よき花ハ黄ひろける花柚かな　蓼太

咲とよきを似枝よ誉る花柚かな　一得

ゆゐしに一つあんたのむき花柚の娘　阿人

折しきハ青山葉の花柚かな　吐月

茄子

紫の小柄あて花柚の娘　蓼太

祓ひ道条ばかり花柚かな　午心

盗人ハ見るに笑はむ柚の花　六窓

あつ湯をかけたる茄子の花のかり　蘋太

折まで露おきも萎むけりの花　鬼秀

けしの露たるに茄の花あわれ　太江丸

ゆふべハかかる咲てけしの苗　郎娥

ちゐさきへ植る茄子の花　渡舟

ころみる家のみずしの花　白麻

芦にハおぼしき咲れ茄子かな　吐月

七月の乏しの月よけしの花　寥松

しら菊に積てもろき月夜かな　蓼太
ちるまへもちるけしきなしけしの花　李童
咲てからんて何思ひ見えけしの花　月巣
鶏合や嵐の中のけしのちる　巣兆
面影や雲ほとゝぎす故郷のむし　[illegible]牛

夏木立

雉子も啼や夏木立　蓼太
人静に道行僧や夏木立　御庭
傘かぶる一里しくしてなつてしる　以月
かくるゝ軒端の夏木立　不言

螢

それかとてまよひ飛や螢の宿　嵐雪
宿かりに人逢の川ぞ　[illegible]

旅寝して螢の行くえかな　奇峯
うつ蝶や螢ふとつ川うしろ　梧泉
かしかしや女三人螢ひろふ　志碩
松風に吹かるゝ螢の影　恒丸
湧出に如意のうちて羽蟻かな　吐月
宮堂の古家呉る羽蟻かな　文峨
旅人の声きせて渡る羽蟻かな　了輔

羽蟻

菖蒲

五月

しら尾の花に菖蒲かな　嵐雪
玉水の何やめ夜咲る白ひの影　萬太
世の花乃尾かゝきん軒何や見　六之原

幟

一力ふせん ちやうの九節　嵐雪

ちまき代をまつ使へておやうへ　吐月

捨る菊し菊へまちやめの朶　虚舟

のほりに都に雲き立けり　蓼太

門松の嵐をもちの幟り南　湖泉

足のうれにけりとる旗の幟かな　老鳥

花世りとちまきもちる兜かな　蓼太

きりぬ太刀をたけゆる幟鉾　子心

煉りけり濃きれけり五月　蓼太

百煉鏡

ちまき

みもかくは上かなし　粽五把　嵐雪

ほうに我せみけまき粽のかな　蓼太

競馬

きられ上戸もなちまきかな　六笑

ちまき粽結ふ鉾のいとる卵　梧泉

汁に煮て粽をくふ家かな　月守

幕の幕の間をいや毎ちまき　天府

粽結ふまちまし十指（カツサ）　五拍

草の花の宮の花かまき粽かな　吐月

千代紙の鳥計も見し　まち粽　了輔

藤ちるかまれ目出や雲雀　嵐雪

宮笑の浪に藤ちるかなる　蓼太

又今日も心見ーくもちま　得魚

くもへち何利あらし伊す　月巣

蚊遣

赤くなる旭にかくる蚊やり哉　斑象
毛のもやうの蚊にて人宝に　氷花
おもふくは男なやふしくゆる　砂月
二三畫居ねも淋しくゆる　了浦
蚊やりかや前に女の石かゝる　嵐雪
蚊遣火の中に乱る犢の尾　不騫
隠家のくれて蝶淺し蚊遣哉　蓼太
見郭の墓遠ける蚊遣かな　雨翠
加茂川は月見てゆる蚊遣かな　普山
咲に旅人退して蚊遣かな　婆心
蚊やりかや膝ひくする纏舟　百里

五月雨

蚊やりして深夜里は月松けり　蓼太
世を大ふてもてかよはする蚊遣かな　居逸
月の出る時して蚊遣の外に来家　月巣
待宵乃先へ消ゆる蚊やりかな　吐月
水口の戸をおのれ蚊遣哉　静山
おもひゆけりハ紀る蚊遣哉　六窓
蛰ゆすゆるけり蚊遣火　荘丹
月代よ都の蚊やりかな　蓼太
五月雨や壁切の徹す潟の底　嵐雪
記よし撫よあつまるも月なる　吏登
五月雨や松か月　蓼太

五月雨や能くもならば浦たかり　吐月

さみだれや降ふも心のおもて降る　椎馥香

五月雨や雲みつゝくる淀船　秋良

さみだれに子を使ひけし夜の雨　年心

夕暮のさうしきよ五月雨　完来

五月雨わかきあふも降るも花のりけり　沙羅

五月雨や町家ともに灰垂れし　柳荘

五月雨や浮かるゝ二輪の蛇のうき　氷堂

さみだれや淀瓢の雨の味しら　風馬

五月雨や田舟に乗りて人わたり　蕪た

さみだれ鷺刈る人や流ればく　寄生

五月雨や小田の中に汐りしら　不塞

さみだれや遠き篠の雨の音　逸賀

五月雨や見ひろふ雲の首　宿鬼

さみだれとなりてなきり輪ぶ　玉宇

五月雨のきぬ毛似てなきつる　雪峰

五月雨や鴨居にかゝる枠の音　来奴

五月雨やかゝる中にも日和癖　柳絮

浮草に流れも何か五月雨　吐月

五月雨や小草花咲も嶋上　暁鸞

ひまなくも浮世五月雨二三日　岐牛

乱きなくて一丁物のたとへ五月雨　沙巖

皐月闇

五月雨やみやこのくもいさり松　普成

五月雨にひと日をくらし乗合　蓼太

たゞしは茶のうちかきちかみぬ五月雨　完来

五月雨やよしぬもれば浪はよう　蜻羽

招きなくし五月雨くる宮の御　夫水

傘に押わけみたる五月闇　千布

子をくはへて猫も出けり五月闇　吏登

水雞

八橋や向ふへわたる何の花　完梁

蘋の葉は夏来る水雞かな　蓼太

夕月のうちは明も門の水雞　完来

[illegible]水雞襟のあゆくれ家　又(サッテ)栄古

あくもあの雛の人言る月夜かな　吐月

声立ては月やおくる水雞　如蟆

月の夜ふかくてはたく水雞かな　頓吾

本堂を叩て水雞かな　蓼太

老鶯

うぐひすや已に月日も老にけり　普成

鶯や老ともしらず梅やはし　玉桂

老れまでもうくひすの[illegible]　蓼太

若竹

須連続で節根がつゞけり竹　文足

若竹のそよと吹く風や月　得魚

関今のうぐひす竹　月泉

晴れ毛も日の目をさし籔やこぼし竹　斑象

帷子

松を出て風に風なく行かし外　吐月
里川や水の中へのかゝる手竹　寥松
かたびらや住居るきぬき男なる　吐月
撚られ是袴ハ何の助すぢや　氷花
紗綾の美艶に似たり白縮　白麻

紅花

みちのくや深き色くる辻かなか　千心
夕ましくて抱かる行り辻の花　升古
都までゆくり息ハや花の色　吐月
唇にうつれハなを濃し露にのむ　松隣
男まえつきもせまもあし紅の花　石漱

栗花

咲きしめ今の白山や栗が花　信中 玉芝

蕎花

手のものすく塩の跡らや蕎麦の色　完鵞

合歓花

ゐとの中の底のあるやねふの花　蓼太
ねふの宿なのくるち錦のみの薫　大廿八 萬淳
合歓はまゝや泊る亭のる家しき　山松
川せかれ風のかゝる行おとひけり　蓼太

翡翠

かはせみや涼し一はち八せ居きた　吐月
川堀や水の底をも碌刈松　完来
翡翠一室の附や苗代色　嵐雪

青嵐

荒礒や月も上きる何かし　蓼太
秋の空のおこ荒たりてあを嵐　吐月
吹あらす瀬をまもろのる何かし　聿兵 百折

青田

すゞしさや波たゝぬ劔よし　虎雪

二色に青田の中の青田かな　六窓

天地の隙をとめたる青田かな　古芝

むかし紀の田を売る青田かな　温得

萬代の水もおなじ青田かな　茶宜

傘さして行しゆかりの青田かな　了哺

田舎扇

秋の來るあつくるしさん田舎扇　器水

聴空は絵に扇の何しかな　蓼太

家毎に扱ふ露とゞく扇かな　吐月

夕ぐれの手もおせ見る扇かな　時中

秋近し扇の風の通ひけり　梧泉

團扇

おもしろし一つの瀬の扇かな　老鳥

いそけなきはれとられる扇かな　蓼太

白扇蓼挟てもひらき　世碎

折られたるやしもさる扇かな　長梧

手りし此二本さし紙の扇かな　鳩斎

天地の外なきにあふれたる南　女 冬琴

絵手絵を閉れて要む扇かな　鬼守

雨寒て去えし立扇かな　寥松

植つけの田つり見ゆる壺扇かな　蓼太

擬くて走ろ牡丹の花かな　子貞

みどり子によひるみせて壺扇かな　吐月

まつしき月にかく迄てうちうかれ　花明

蝶も身に添ふものとて團扇かな　故班象

向ふもち巳藤の我之にかゝれはこそ　大江丸

萍

うき艸の躁くや風の月　三鶴

萍や滞りなれ余所もなし　起石

百合

山中や苔しきかゝる家のうしろ　蓼太

姫百合や葉末あまりて咲たまり　連牛

すさましう家の下百合咲にけり　午心

赤百合や日暮て居る里の精　寥松

居枝織に百合の花さく山路かな　良娥

山寺や茅茨の中に百合の花　鷺雪

ほたる

山伏の宿へ通ひや山ほたる　節向

遊ひ来て夜は月に隠るゝほたるかな　蓼太

独り来て松本は螢淋しからむ　山幸

名の川をて庭の暮はき螢かな　其禮

たまくに何となくて螢の飛　貢雨

ともれ落て蝶ほどよ殿の飯　寥松

みよし野は落て流るゝほたるかな　文足

月先の草の門きる螢の如　月巢

ちと絶しみは遠通る螢かな　吐月

二季せよ出て飛ぶ夜の天の河　故班象

柳葉は露ほどくし出かな　好秋

夏月

しころ〳〵摘もちて大は蛍かな　蓼太

蛍火や夏ハ土踊のましぐさ　班象

五月雨明惜よ逸り蛍の形　吐月

蛍火て芝丹枝の風情かな　オハリ 蝶羅

葛の葉ひらりお寿やふかりる　普成

うけろふの柱に見え行て飛ほる　完来

五月雨ハ目らもの凄し飛蛍　雪武

めぐと隠す雲ハ見つそ飛蛍　崇義

神山すら青はものく夏の月　蓼太

人迎をき舞妓役者や夏の月　荘丹

椋くよ流ふ新まへよそれ夏的背　茂林

罢了居ゐ〳〵め行ゐ夏の月　山幸

夏は月見り守も気り〳〵しと　スルカ 茶童

迷ひ子は知人出ゐり夏の月　仝 菊二

夏乃月よの宿とりて探さり行　普成

橋を銭せ柳の影や夏の月　班象

みより子はよき顔もて夏の月　完来

赤厨の出ま縫ひ任流川の月　一貫

あふなしと出たは橋あり夏は月　サッテ 斗水

夏の月舩のたハしは流れ行り　寥松

おもしすり簾陰ふや夏の月　呉春

やまみ便厠涼しや春川の月　大江丸

何所登るゝ舟あり夏の月 — 普成
ともかくも雪のあとなき川の月 — 南養
濡雨戸螺寐しなき夏の月 — 幸橋
夏の月串に鍛されし残茶かな — 下サ 魚房
口近きむしみ無や夏の月 — 大江丸

夏山

夏山や旅人なくハ枝も鳴し — 吐月
夏山や出来たる寺に滝ずまり — 咸里
雨雲はしばしも落る夏の山 — 歩月
登りてハ風を自く夏の山 — 一巣
夏山や笠を抱きる青葉かり — 人左

夏野

牛かくす草き何もて夏野かな — 吐月

夏艸

夏の草やひきを遠りなるか息 — 枝直
糧夏村る灯のともりける夏野かな — 月九
夏草や下に滴るさゝすゝき — 吏一
夏草に足も浸して秋るなる — 吐月
秋近き艸の香に蘇つき — 一雨
東つ草や抱えるある柞ゝ扇 — 蓼太
夏草や丹にも汐さし家二ッ — 寥松

白丁花

山水のほちく咲し白丁花 — 斑象

竹植日

帯の植る千代の本居通ひ道 — 可山

火取虫

火とり虫こゝ放とりて悩きある — 蕉笠
人のタアをとさそいて火とり虫 — 如圭

茄子

三夏混交

茄の子は淋しき顔を知へりけり　吐月

なすびには日当てなすのいろよし　大江丸

性心の手につく茄子の名残かな　貞松

まづ茄子を顔摘顔や日傘　石意

大仏や人は眠き五六月　東登

その嫗の旅立淋し夜羽折　完来

夜淋し鮓くふこゝろ寺は捨　青牛

六月やゆふ飯色の一風情　寥松

夜の旅夜明を月はおもしろき　菅雅

藻の花

藻の花や僕なふみの手あかり　蓼太

藻の花やゆれあふて藻のたちうけ　雪萬

照射

弓杖に寄よる顔の照射哉　嵐雪

祐成が何を教へ世ぬとめしかな　蓼太

時致無山ふる別て照射哉　仝

嘘の笑に聴入る大串か哉　蘭更

萩茶を消されて腐るとめしかな　蓼太

照射山爪よりはけてゐまりけり　一兆

火串入て手をや抱くらん松の枝　午心

笑語小生て客を見る照射哉　寥松

火の力流る所りかすかし山　嵐舟

古法か画の夜しく出て来まし哉　蓼主

六月

氷室

六月も桜よ志るや氷室守　蓼太

加賀殿の梅ちりきぬ氷室山　老鳥

こしらへりぬかへりに氷の貢　班象

ありの都捧めつゝし氷の貢　深松

古川に氷ながりき桜は室の雨　青牛

氷乃貢河つきし清水は日あり室　午心

夏氷日は照りての心地よさ　翠兄

三寸の氷におくる富士の雪　蓼太

六月の騒河は雪の都かな　月泉

祇園會

立向もさらに踊るや祇園会の傘　嵐雪

祇園会や京八日傘は下をいり　蓼太

我らにてみへあれは鉾の児　大江丸

祇園会や御代も実に今は京　吐月

捧ぬ夢の拝みつゝや鉾の児　豪山

ゆるゆる鉾やけいきの流の果みえる　氷花

夕顔

夕顔や儀をきけえ鼓屋の桶　天府

ゆふ顔や空也の月みて即菩提　蓼太

夕顔や浴をくるゝ戸一枚　午心

夕白子欠てを涼しき月夜かな　春鳥

ゆふのほや待人持て咲ゆきき　班象

夕顔や二布かけしも垣のさ滴　寥松

青鬼灯

鱸

夕くれや色に寝かはる閨の上　蓼太
あきはし夕顔の色にかくれけり　完来
夕の日や軒にならしみる玉笄　三上
中の秋や今に色まとかあれ　大江丸
夕顔や又かやてかさらつま　素潮
あかき色やいもすられぬ青鬼灯　嵐雪
かきつきや此色すもあかよう　吐月
鱸くるの價かとりてあはれ　六窓
夕暮に鯛よりもまる小鱸かな　蓼太
打水に浪越す鱸の器かな　歓丈
鱸くるや芝居すきなる人の中　寥松

夕顔

晒

夕顔や此のあるあたり垣の外　蓼太
ぬりしまにや夕ゐまり也　捨旋　巴明
ぬり夕顔の夕あかきゆふぐれかな　鳴皐
夕顔や二軒の垣根よりあはれ　吐江
ゆふかほや寂しきまゝにぬる花かな　月巣
夕顔や夕暮淋し間かなり　青牛
ぬりおもたるに好みかな　何　吐月
ひる顔に浮し梅白ふ伏家かな　牛毛
みとり子は墨もいつ晒しの布　蓼太
さらさらと又一夜の苦はさらし布　夏来
秋近き月枕に晒しぬるさらし川　菫路

一夜酒
淡雪
川骨
石菖
百日紅
冨士詣

涼しさも夜寒も夜なかまる晒の禾　蓼太

いかなれはさしみ造らん一夜酒　仝

淡雪や宵咲かさき日ざし哉　吐月

淡雪も日をとられ降る香　完来

川骨やさらきおもへた語る果　吐月

石菖や海山銭る住居かな　貫嵐

鷺浚蓮の新のさしりや百日紅　完来

手桜ふる菖蒲縛の谷やふ二詣　蓼太

ふきたきの心ハ持し冨士詣　不騫

火はりてハさしふふ二勾来山径り　台窓

あらしつくら見樽しふしまうて　丈水

十三番花

芭蕉の塔の谷しや冨士まうて　完来

谷まきて冨士へて見る日本橋　秋杵

六月や雪何れハ本拝不二詣　吐月

思ふるのはし銭一月拝冨士詣　午心

人の身は水くらたいる冨士詣　蕪住

はしらそふ花も新みかけてん　蓼太

咲ふ都も何のそふかにさ葉花　鳳足

松原や花をきくしてやらう　六河

見の手は花ては何まさ葉ふ　嵐雪

禾嵩と楼も花の後さ手を　蓁左

花の皮ふふき四条河原かな　完之

胡瓜

瓜漬む人や月夜の出来心　文亭

君すゝめ也終へて胡瓜まくさし　寫居

胡瓜もて母住子等や人たゞ　梅京

歌ひて水より涼し胡瓜哉　菜丸

月すらす枝より月の香物人たゞ　家松

心太

夜さ来ぬ浅黄行の心太　貞松

手中やる乃入ぬるところてん　勇記

人たゞ歩くもとさへ流しつゝし　吐月

葛水

葛水やさかしきる船乃内　五三

葛水や秋寸ぬくふきみ　六葉

葛水やあみさ経仕の縁すし　吐月

暑

柳見へ清水見ゆる暑この旅　東萱

此路の蝶さへ暑きかつきゝ哉　蓼太

いそつきは暑き里のあ川さ哉　至丸

菜の花は暑き縁の暑の都　蕉巴

わくやくし日影も草の暑さ哉　月守

後の葉そて暑む松の藤　班象

硯箱やむは暑きかつきゝ哉　完来

竹さ矢組の橋の暑の甫　蓼助

紫陽花をはひかへて暑さ哉　左帝

此山に雲のかゝりて暑き哉　普成

三ちるへ三波桑の暑の都　子具

おもたかのふとりて見ゆる何つさかぬ　嵐雪

ようしくとちらちれ小鹿の寝この夜　吐月

峯の雲は岸の船の何川さらし　一草

大津画の丹のうすき暑さの夜　蓼太

伶人のよそほひ涼し雲の那　好急

叢の蜂巣を守りて暑さの夜　之甘

見るに梁ひきし枝ひろ蝶　可笑

川浅みうこかぬ船の暑さの夕　百里

宴す何りも子もあつ家の暑かな　沾吉

あふれて川梯子て一暑さかな　米光

雲峯

北にそしつりとりかり雲の峰　蓼太

行婦人

分かはつきあはせ蚊や雲のみね　虚舟

うつつ海をこえて行雲の峰　小町

雲のこぬ月只西へ行海鳴く　完来

まよりゐひそみ行く外婦人　蓼太

あ雲を葎も夜を隠れ外婦人　月巣

比見と枝く引よせ川行婦人　蓼兜

何より文すあけ淋し外婦人　一公

詠猪に近ぬ猴や外婦人　吐月

淋しき人まあ何き行婦人　子交

抱か粽や枝明て入れた花落　落笠

噺を小町か骨や外婦人　蓼太

簟

簟月をまろ居に寄しけり　斗心
弓ゑの帯の細さやたゞむしろ　蕪村
よそに涼風吹ぬ事も簟　春蟻

蟬

あなかなし離るゝ蟬の殻　嵐雪
豆森をぬ里人ハなかしこゆる声　完来
蟬なくや雨田巡りの神一社　白醉
同盛や岬川緑なく蟬の声　杉雨
聴に入る別もなしせゝの声　故 班象
ひとつ蟬や暁の音ハ蒸ヘ牛　寥松
蟬なくや日御ふて居る松の下　梅堂
竹に来て我蟬わとしらさハ　嵐堂
松山を懸ひろむたり蟬の声　班石
世の程暁てや蟬乃ころもり　須免
暁ひ蟬やもなかなきて夢もさめ　居逸
きみかふまて啼しの蟬乃ころ衣　洛梅
蟬なくや木骨か白山の木の月　素兄
松明にすくなくしよるの蟬　亀戈
蟬なく天離帯に似るかな　年心
一山の枯木も啼なし蟬の声　之曉
後に雨れ蟬に猿立橋の南　吐月

きさり井

きさり井や雲の下ゆく音かなを　蓼太

夕立

夕立や蓑子かけたる竹床　嵐堂

夕立の降てもやみ牽牛の星　吏登
夕立や何のさはりもなき船の蟹　天府
中ぶりや濡色見せて樗の實　吐月
夕立や旅けふりさへつれてけり　百里
夕立やおとひ切る傘の音　千牛
夕立や雲して来る海の色　南才
夕立のきまの森の首枝ぶり　左更
夕立や猿て走る人飛とゞ　山幸
夕立や弦子きはしく秋涼し　歌白
夕立の流れ行ぬ牛の川　百鏡
夕立やをひて大き黄薮の鯨　士朗

酉丁

夕立や游りゆくる湖舟　楮泉
中ぶちや川吹乙し来る一屋　桑古
夕立や晴て出はゆく松の風　梵水
山ちや夕立こね籠の鮮　故流
夕立や濡てふちの二つ碇　宜芰
夕立や急ゆく晴る人の影　麻石
夕立や見てぬれて菅着　午心
中ぶちやふとりたか荻の萩畑　六窓
夕立や霧も寄り来る最上川　押義
雨ちや宮の羽根も晴るまで　蓼太
むし取も椛るる蒸樋のもろふ　人左

嘉定

清水

むすぶ手やちからにもちらすこよみ　虚舟
むすぶ手の裾見て遠き月日かな　月窓
むすぶ手や松は一日乃路甚　班象
むすぶ手やすゞしうなりて玉ひろふ　青牛
むすぶ手や清水やせは秋の月　山朝
秋風乃細まりつる用の露　秋杵
十六夜諸寛竟一つや春雲嗒　蓼太
行もくもものゝくぬ清水かな　仝
石さへ押す秋の思や茂清水　完来
おくハ何ゆかる茂しき河　普成
枝なくてさらさら流る清水かな　六窓

湧よりも流れて多き清水かな　暁長
足入ぬ人の心かしこしつらる　月巣
むすぶ節ハ白玉ゆかり清水かな　吐月
寄りそう姿に清水や涌松かな　雪萬
一掬に深泉の葉会清水哉　故班象
費へる田井の中なる清水かな　葛人
樋まても千里の清水かな　巣鶖
松かげは清水もきよき流かな　魚流
心ある庵もきまる清水かな　素月
草の戸に知らぬひとつの清水かな　午心
何も傍も清水の隠ぬ野かな　蓼太

一寸の蟲もさめぬ清水かな　五舟

西行のうらもしぼし涼し苔清水　楚狂

隣好て汲尽まじき清水かな　月古

見いさゝか影凉しき清水哉　其牛

人声は桃の通り清水の辺　吏登

もゆる此小萩をよする清水かな　午心

苔踏て人ならぬ中の清水かな　蓮佐

かゝる日を待て岩もる清水の影　鳳宿

六月に来て千年のつもる清水かな　蒲太

ちこらせて石に寄り行く苔清水　蓼巴

酔ふ時は松に風ある清水かな　至京

さゝ波で蟹の流るゝ清水かな　盤中

山陰の月あかりする清水かな　六窓

手にして汲まぬはいつも苔清水　金羽

家路の川中に流るゝ清水かな　蓼太

蟹ひとつ柳にそゝる清水かな　寛之

苔の笹葉をもつて清水かな　士朗

鵜

大はつと涼みくだる鵜舟かな　吏登

山川を湯みして下る鵜舟かな　蘂左

鵜さへ乃こえてゆくよも老になる　玉宇

是もまた来る松明や鵜の舟　虫吟年

新鵜で出る鵜のころに月秋　呼景

蓮

九ッめくるましい出る静間の那　意翔

静けさいの影見て趣ふりひりぞ　如毛

つれ静乃咄すきる百銭残りけり　達琴

白蓮に人影さしてお所か　藻太

飯の香もまねものよ蓮の花　青牛

白蓮の白いあるさもそ根かな　無光

蓮の香やかくしは下る橋いよう　阿人

折られる蓮より清む心の那　一鷺

蓮咲て涼しさも又涼し　吐月

雨の蓮に余上一味子聞かんと　沙雅

蓮の葉や西押月あらぬ雨も香　藤太

蓮乃香なお茶も赤所に登　完来

蹈蓮に香か蓮の香に持ちけ蓮の雨　午人

ぬすみ所も降りてさいさ蓮の雨　家松

河ちさめに五器にものや竹粒　嵐雪

紫陽花

紫陽花の色のたすけも何か彼の塚　曲紘

河ちさるや色よ所いたるさらぬ雨　吐月

紫陽花や色見てより七小町　家錦

川狩

川狩や飛も必竟世のことよ　大江丸

撫子

なでし子やきられりくてなりりき　笠

虎が屋や晴天かしてとゐり川　善成

なでし子や小石の中に打ち咲　松枝

汗拭

ふまれても和申さればや汗拭　嵐雪

納涼

大きな犬を追ふ夜の涼かな　嵐雪

皿ひとつ氷子くくすゞみの家　蘆本

すゞしさはなでしもの揺く星の月　吐月

夕すゞみ申しきる刀かな　完来

かくてすゞみ涼みも竹に月ありけり　蒼虬

涼しさや帆の掛て行波路哉　乙児

出よとも屋上人逃て夕涼　蓼太

子も孫も月よ何の門涼み　在白

すゞしさや麦に八僧の松並り　巴丈

ふるさとの吹して涼この那　文足

夜舟より関れ新し夕すゞみ　吐月

家ひとつ風枕に来ぬ涼哉　完来

夕涼簾さひしき庵さしけり　布谷

すゞしさや揺もあらぬ松の露　不騫

夕涼気ぬ知もなくのりけり　蓼茂

夕すゞみ茶筅の(?)を掃せけり　蓼松

涼しさの果も我家にまかりけり　大江丸

月の出て知る人多きすゞみかな　吐月

すゞしさや宮仕舞する井桁者　蓼太

蝶の昼寝の庭や下すゞみ　斑象

夕つゆは何処の風ぞ夕涼み　暁長

月代のまじしきりや涼み舟　普成

出る清やけいせいとまる夕涼　百里

夕すゞみ女よ腕つよき扇かな　秋兎

咲あきる花よ咲見れ月の門すゞし　一巣

打もあれ家重しけり夕涼　貞松

子ほそりぬひとり涼みて月よ新　竹阿

子は秋に里の名問ふや涼かな　竹人

月の出も更えて涼しや松の間　士朗

涼しさや小松の中の鯰若　前文

蓑一つ鞠蹴て出る夕涼　並成

夕すゞみ杯たてゝ代よて　圭路

蛸つまり川会以て門すゞみ　同守

財みけて家橋都や夕涼とも　兜月

すゞしさは棧すがりける月松に　青朔

いつちのよう涼し峰の寺　露澄

すゞしさもちは暮石のおもて計り　夔太

岩もまかで里橋ほかけみ　月涼

納涼

夕すゞみ橋の恵みる小舟かな　有采

門すゞみ四条の月を聞けり　葉吉

我もれも水売ふ江戸の涼かな　季峰

夕涼魚串我呑む都かな　寥松

蛙つくも庭すゞしのよい門涼　菅椎

夏桜月のゆくや淡路島　嵐雪

人去て涼え行市桜川　蓼太

釣りゆく夜をもあけの青簾　不騫

麻の葉やうに打かくる桜かな　虚舟

平等[illegible]の花も[illegible]桜かな　五麗

正直の影を先へ青簾の　六窓

扇ゞの我ゑよ桜川　普成

形代の猿を夜の[illegible]　吐月

花桜[illegible]人も小の月　青牛

すゞ[illegible]桜川　蓼

第 6304
昭36. 3.

渡邊氏